
適当な現代人が幻想入り

ぜんそく持ち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

適当な現代人が幻想入り

【Nコード】

N3673N

【作者名】

ぜんそく持ち

【あらすじ】

今まで適当に生きてきた高校生、高峯たかみね流斗りゅうとがスキマ妖怪こと八雲 紫によって幻想入りするお話です。

この小説を読む前に

適当に生きてきた高校生「高峯 流斗」たかみね りゅうとがスキマ妖怪こと八雲 紫
によって幻想入りするお話です。

注意書き!!!

- ・ 作者は東方 project の二次創作 ss を読んできて触発されて書き始めています。
- ・ まるつきり初心者なので色々意見を言ってもらえればうれしいです。

- ・ 文才がないので文章がひどい

- ・ 東方 project のキャラはしっているものの原作はあまりやったことがないのでキャラの性格が変わっている場合があるかもしれない。

- ・ 更新は不定期ですが出来れば1日、遅くても1週間以内には更新したいと思っています。

上記の事を了承した上でもよんで頂ける方はどうぞ楽しんでってください。

プロローグ（前書き）

とりあえず主人公の過去の話です。

あと2話くらいは主人公の昔の話になりそうですorz

プロローグ

俺には昔から、他人には無い能力があった……

最初にそれに違和感に気づいたのは俺が小学5年生の時だ。

俺はその日、小学生にしては夜更かしと言えるような午後10時まで起きていた。

当然子供の俺が睡魔に耐えられる訳もなくそのあとすぐに眠っていた……

そして次の日の午前7時30分だと思ってて起き、そのまま自分の頭のすぐ近

くに置いてある時計を見て絶句した……

その時計の秒針は午前3時を差していたのだ……

俺はわりと寝起きが悪いほうでいつもは学校が始まる30分前の午前7時30分に母さんに起こされる。

だから今日は母さんが起こしに来ていないことから「少し早く起きた」と思っていたのだが……

これは異常すぎる光景だった……

だが俺は生来、結構適当な性格をしていたのであまり気にせず「寝

「時間が増えた！」程度の事しか考えてなく
そのままいつもの時間まで寝てしまっていた・・・

これが俺、たかみね高峯、りゅうとく流斗が始めて自分の違和感に気がついた時だった。

プロローグ（後書き）

どうでしたでしょうか？

自分的にはうまく書けたかわからないー（作者は完璧な素人のため）
ので感想&意見を言ってもらえたらとてもうれしいです
誤字、脱字があればよろしくお願いします。

プロローグ2（前書き）

やっぱりノリで書くと恐ろしいことになる・・・
文章がででこない・・・

プロローグ2

あの時計の違和感からはや4年がたった。

あの違和感は俺の適当な性格のおかげ？で未だに違和感はあるが日常生活に支障が出る様な疑問にはなっていない。

そして今日は、高校受験だ。

俺は、頭はそんなによくなかったから我が家の近くにある中程度の普通科に行くことに決めた。

俺の担任には「9割の確率で受かる!!」とお墨付きも賜ったので落ちることはまず無いだろう。

だが俺には一つの誤算があった……それは……

俺が寝起きが悪いことだった！！

この大事な日に俺のスキル”寝起きBAD”が発動し今、まさに遅刻しそうである。

「ちくしょー！！俺はドジっ子でもないのになぜこのタイミングで！！！」

受験する高校が近くということに油断し昨日は夜更かし（俺はこの適当な性格と担任のお墨付きのおかげ？でいつもどおり過ごしてしまったorz）してしまい俺の起こし係である母さんも「おもしろそう」「という理由で息子を放置。

「子供の将来がかかっているかもしれないに「おもしろそう」ですますなよな！！」

そついいながらも全力ダッシュ！！。だがいかんせん起きるのが遅すぎた・・・もうこのトップスピードを維持し続け走ったとしてももう間に合わない。

「もうだめだ！！遅刻なんていう最悪印象で受かるわけねえ！！こ

んな時《時間でも止まれ》は絶対間に合うのに!!」

こんな状況で言ったこの世ではまずかなわないような夢物語な願いを言った瞬間俺の見る世界が変わった。

「なんじゃこりゃあ・・・」

突然目の前の風景が灰色に変わり、道ばたでノロノロ動いていた猫は完璧に動かなくなり、世界が完璧に動きを止めた。

「これはあのおとき感じた違和感と似た感じだ・・・」

だがそんなことは後でいくらでも考えられる!!今はこのなんだかわからない現象を利用して俺の将来を勝ち取りにいくぜ!!

そして急いで受験する高校に急いだ俺だった・・・

受験も終わり家に帰ってきた。

受験中はちゃんと受験のことだけを考えられた。よって出来は自分の中ではそこそこの出来だったから担任の見込みどおり受かるだろう。

母さんには朝のことで文句（言ったが母さんには見事に受け流されたorz）をいい、手を洗って部屋に戻り私服に着替える。

そして今朝のあの現象について考える。

（やっぱりあれは俺が起こしたのか？4年前にも時が遅くなっていったような気がするし、今回のやつも俺が時が止まれば！！という願いが叶った・・・俺にはなにか時間に関係するような能力でもあるんだろうか・・・）

その日の午後はこのことばかりを考え、出た結論は高校では部活に入らずこの自分にある謎の能力の追求をしようということだった。

プロローグ2（後書き）

なにかあまりに主人公の能力への気づき方がおかしい気がするorz
やはり文章を書くのはむずかしい・・・

プロローグ3 (前書き)

今回もプロローグです。

ちょっといろいろ疑問があるような仕上がりになってしまいました。

・

やっぱり文才無いとつらいですね・・・

プロローグ3

早いもので高校受験のあの現象からもう1年。

今は、通い慣れた高校への通学路を登校中である。

あれから高校に入ってから部活に入らず自分の能力についていると実験していた。そしてわかったことは俺の能力はなんらかの動いているものに対して発動するものらしい。

実験を始めたころはあまり進展はなかった。だがある日を境にいるような事ができるようになってきた。

自分がこの能力に気づいたきっかけになった時間に関係することは、通常の1・2倍程度ならば加速・減速する事が可能。まだ能力に自覚してから日が浅いせいかわ、時間を止める事はできなかった。

他にも水道から流れる水を数十秒程度空中に浮かすことや風の向きを変えたりすることもできた。

今は、使いすぎると少し立ちくらみが起きたり、体がだるくなったりする。だから滅多なことでは俺はこの能力を使ったりはしない。

無論、自分の友人にもこの能力の事は話していない。

だが一部を除いて話している人はいる。

一人は母さんだ。

自分の母親だから知っておいて欲しいと思いきしたら化け物だ

と思われ離縁になることも覚悟で話したのだが、それは蛇足だった。

「流斗はすごいことができるのね」

こんな風に軽い感じで受け入れられてしまった。

俺かなり勇気出して話したのに・・・

まあ実はいつもと同じぼやぼやした母さんでいてくれて泣きたいほど嬉しかった、というのは秘密である。

そして他に知っているのは・・・

「流斗さん、おはようございます」

今、通学中の俺に話しかけてきたライトグリーンの髪に蛇と蛙をイメージした髪飾りをつけた女の子である。

「ああ、おはよう東風谷」

「もう早苗って呼んでくださいっていつも言ってるのに・・・」

「ははは、悪いな。早苗って呼ぶより東風谷の方が呼びやすいんだよ」

「はあ、でもいつか絶対に早苗って呼んでもらいますからね!」

「善処してやるよ」

名前は東風谷（こちや さなえ）早苗。同じクラスメイトである。

入学したての時、隣の席だったこともあり今では一番仲のいい友人
だったりする。

「今朝はなにか考え事をしていたみたいですがどうしたんですか？」

「ん？ああ、ちょっと俺の能力について考えててな。そういえば
この能力が発動し始めたのって東風谷に守矢社神もじやに招待してもらっ
た時ぐらいだったな」

「週1で神奈子様に祈ったおかげですね」

「俺の500円も無駄じゃなかったってもんだ」

そう、実は俺の能力が発動し始めたのは東風谷が巫女をやっている
守矢神社にいるある神様にお祈りしはじめた時からなのだ。

〈少年回想中〉

「流斗さん、最近元気がないですね・・・どうしたんですか？」

それは俺が東風谷と仲良くなってから2ヶ月たった時の話だ。

入学してから、部活にも入らず延々と自分の能力の実験をしていた。
だがいつころに俺の努力は実らず最近には鬱状態に入っていた。そん
な俺に東風谷が話しかけてきた。

「いや、ちょっと熱中してたことがあったんだけど全然うまくいか

なくなつてな・・・ちつと鬱になつてたんだ」

そう言うと東風谷は何か思いついた様に俺に話しかけてきた。

「流斗さん、今日の放課後少し時間ありますか？」

「ん？まああるっちゃあるけど・・・いきなりどうした？」

「私が放課後にいいところに連れて行ってあげますよ」

「ん、まあ東風谷がそういうなら連れて行ってもらおうかな。気分転換にもなりそうだし」

「流斗さん？たまには神頼みもいいものですよ？」

東風谷は意味深なことを言つて自分の席に戻つていった。

じゃあ東風谷に期待しながら残りの授業を消化しますか。

（少年・少女授業中）

そして放課後。

「じゃあ流斗さん、行きましようか」

東風谷が手早く帰る準備整え俺の席に来た。

「期待してるぜ？」

「任せてください」

少年・少女移動中

「ここですよ」

そういつた東風谷が指を差している方向にあるのは・・・

「神社？」

結構な年月がたっていそうな古びた神社だった。

「少し境内でまっけてください」

そう言つて東風谷は神社の横にある家屋に入っていく。

「神頼みつてのはこういうことだったのか・・・」

ここに来てやっと去り際にいつた東風谷のセリフにピンと来た。

「まあ東風谷がせっかく連れてきてくれたんだ。かなり大目に金を入れて祈つておこう」

そう思い神社に近づいていく。

そして神社に近づくとつれ、賽銭箱の近くに人が立っているのが見えてきた。

（東風谷はまだ家屋から出てきていないから他の参拝客かな？）

そう思いさらに近づいてみると、その人は現代では見れないような

服装をしていた。胸の部分に鏡のようなものがついた赤い服とロングスカートを着ており、背中に一つなぎの縄が付いている。

かなり珍しい格好だが俺は興味をもって少し話をしてみようとおもった。

「こんにちは」

無難に挨拶を言っておく。

「!!!??お前、私が見えるのか!??」

何を変なことを言ってるんだ?ここに実体があるのに見えるのはあたりまえだろ。

「いや、逆に見えてなかったら俺今すぐ眼科にいつてますよ」

「本当に見えているようだね・・・すまないがすこし失礼するよ」

そういつて目の前の女性・胸がふくらんでいるから女性だと判明・は俺の頭に手を置いて数十秒うなってから手を離れた。

「なるほど・・・潜在霊力が結構あるね。これなら私が見えても不思議じゃない」

霊力?あの某霊界探偵が使っていたやつみたいなものか?まあ俺のあんな能力があるんだからそんなに驚きはしないが・・・

「でそんな事がわかるあなたは一体何者ですか?」

「私？私はこの守矢神社のに2柱の神の一人、八坂神奈子だ」

へえ、まさか神が実在するとは・・・さっきも言ったように俺は自分の能力の様なものに出会っているからさほど驚かない。

「あれ？あまり驚かないんだね？」

「こつという不思議なことには慣れてるんです」

「まあそんな大量の霊力を持っていれば普通はそうだよ」

こんな話をしていると東風谷が家屋から戻ってきたみたいだ。

「お待たせしました。・・・あれ？もうお祈り終わっちゃいました？」

「いやさっきまでこの八坂さんとはなs「えっ！？神奈子様が見えるんですか！？」・・・やっぱ東風谷も驚くんだな。八坂さんが言うには俺には大量の潜在霊力があるんだと。だから見えるらしいぜ」

「神奈子様、流斗さんはそんなに霊力があるんですか？」

「かなりの量があるね。たぶん早苗と同じくらいかそれ以上だよ。」

「そうだったんですか・・・全然気づきませんでした・・・」

「気にすんな」

そついいながら本来の目的であったはずのお祈りをしようとおもい財布から500円を取り出す。

「そんなにいれてくださるんですか？」

「どうせ使うようなこともないしな。これで俺の悩みが解消されるなら安いもんだ」

そういつて500円玉を賽銭箱の中にいれ手を2回叩き祈る。

(俺の能力の実験が進展しますように)

「流斗って言ったっけ？流斗は何か能力を持つてるのか？」

「いや、俺の心読まないでくださいよ・・・」

「気にしない気にしない、祈ってる対象は神である私なんだし」

「はぁ・・・俺には昔から変な力があるですけど、無意識で2回発動しただけでそれ以降いくら努力してもできません。それで鬱になつてた所に東風谷がここに連れてきてくれて気分転換にお祈りしようとしたら八坂さんが出てきて今に至るわけです」

そして簡単に俺の能力について東風谷と八坂さんに話す。

「流斗さんにそんな能力があつたなんて知らなかった・・・」

「まあ今話したんだからな」

「よし！さっきの願いを叶えてやろう！幸いさっきの流斗の祈りで信仰がきて神気も回復したからな」

「本当に叶えてくれるんですか？」

「ああ、さつき流斗の信仰でもらった神気を使って能力の制限を解除してあげよう。流斗の能力は強力で無意識にセーブがかかっているみたいだからそれを少しずつ解除していけば流斗の願いわかなうはずだ」

「ありがとうございます、八坂さん」

「いいよいいよ。ひさしぶりにちゃんと信仰してくれた人間だしね。それに早苗とは仲良しみたいだから特別だよ」

「よかったですね、流斗さん」

「ああ、これでやっと能力の実験を進められるぜ」

「でも無闇に能力を乱用したらダメだよ。この世界でその能力危険すぎるから周りに被害がでるかもしれない」

それは昔から俺も考えていたことだ。

「大丈夫ですよ。俺がこの能力について実験したいのはただの暇つぶしと好奇心みたいなものですから」

「わかっているんじゃないんだ。じゃあいくよ」

そういった八坂さんから少しづつ白い煙の様なものが出てくる。

「これが神気ってやつか」

この白い煙の様なものからは力強さを感じた。

そして八坂さんから神気がでるのが収まると八坂さんは俺の頭に手を置く。そうすると神気の一部が俺の体の中に入っていきすぐに出てくる。

「はい、これで能力の一部解除ができたよ。まだ完全に解除できてないから解除したかったらまたくるといい」

「それじゃあ1週間に1回やることにします」

「わかったよ。流斗と話したのは新鮮だったからまた会えるのを楽しみにしているよ」

「それじゃあ今日はこれくらいで帰ります。東風谷、今日はありがとう」

「どづいたしまして」

そういつて満面の笑みをした東風谷と八坂さんを尻目に俺は家に帰宅した。

少年回想終わり

「そういえばあの日はスルーしてたけど守矢神社って東風谷の家で東風谷は巫女だったんだよな」

「流斗さん、全然驚かないから知ってたんだなって思っていましたよ」

「あのときはホント能力実験で鬱だったからな。上の空で気づかなかったんだよ」

「2ヶ月もがんばって何も進展なかったら誰だってそうなりますよ。ところで今日も神社にきます?」

「ん〜そうだな、行くかな。どうせ家にいたって暇なだけだし、八坂さんや諏訪子と話している方が楽しい」

あれから何回か神社行っている内に能力は完全に解除されたが能力は使って慣れないと本来の力が出ないとのこと。俺は強大な力を欲している訳じゃないので今の状況で満足している。能力解除が終わってもう守矢神社に通う必要はなかったが、八坂さんとはかなり仲良くなっており今でも1週間に一度は話をしている。さっき会話に出てきた諏訪子という人は通いつめているときに出会った守矢神社の2柱の神の1人だ。目玉のついている奇妙な帽子をかぶっていて、見た目が小学生なので俺は諏訪子と呼び捨てにしている。諏訪子も納得している様なので問題ない。

「それじゃあ放課後は一緒に行きましょう。神奈子様の諏訪子様も暇そうにしていたので喜んでくれると思いますよ」

その東風谷の言葉を聞いてやっとついた学校に入る。

授業はだるいけどがんばりますか。

少年・少女授業&移動中

あつという間に授業も終わり今は守矢神社にいる。

「最近はずつと流斗が信仰してくれるから存在を保てる程度の神気は確保できるから嬉しいよ」

「そうだね、私も神気が無くて弱ってたけど今は流斗のおかげで元氣一杯だよ」

「喜んでくれるならやつてるかがありますよ」

神様は人間からの信仰で神気を蓄えないと存在を維持できないらしい。その話を聞いて俺は話をするついでにお祈りしている。

「じゃあ今日はこれくらいで帰ります」

「もう帰るのかい？」

「もうちょつとお話しようよ」

「もう少し居ても全然かまわないんですよ？」

二人と東風谷はこう言うがもうすでに6時30分を超えている。そろそろ帰らないと夕食を食べられない。あの母親は7時までに帰らないと問答無用でご飯を食べさせてくれないから・・・

「いえ、そろそろ帰らないとご飯が食べられなくなるんで」

「そついうことなら仕方ないか・・・」

「ねえ今度はいつ来る？」

諏訪子が期待する様に俺を見上げる。

「また1週間後にくるよ」

「わかった！今度来たときは一緒に遊ぼうね」

「ああ、わかったよ」

俺はそう言いながら後ろ向きで手を振りながら神社を出る。

神社から家への帰り道には人気のない公園があったりする。少し遠くに新しい公園が出来たので子供達はそっちに行ってしまうているのだ。

俺はまだ時間に余裕があるので公園の横をゆっくり通りすぎ帰って行くこととした。そしてふと何気なく人気のない公園を見る。

その公園の中心には奇妙な目玉が見え隠れしている黒い空間が漂っていた。

プロローグ3（後書き）

今回はかなり長めになってしまいました・・・

「まだ幻想入りしねえのかよ!!」と言う人、すみません次のプロローグで流斗は幻想入りする予定なのでもう少し待っていてください。

プロローグ4（前書き）

これでやっとプロローグ終わりです。

プロローグ 4

人気のない公園の中心にある黒い亀裂はとても不気味だった。両端が赤いリボンでくくられており、中から見える人の目の様なものが俺を見つめている様に見える。

俺はそんな不気味な亀裂から目が離せずにした。その亀裂が俺を呼んでいるような気がしてならなかったからだ。

今は夜の7時前。こんな時間に子供が来ることは滅多にないし、さらにこの公園はもう古くなっており近くの新しい公園に子供を奪われている。

そんな状態の公園にまるで俺が来るのを待っていたかのようにそれがあるのだ。

俺は興味本意でそれに近づいていった。

そしてその3歩手前にさしかかった時、亀裂から人が出てきた。

「こんばんわ、高峯 流斗君」

その人は紫を基調としたネグリジェの様なもの着て、金髪を腰まで伸ばした美女だった。

「こんばんわ。初対面なのに俺の名前を知っているって事は、俺に何か用があるみたいだな」

亀裂から出てきたことにはあまり驚かなかった。それよりもこの女

性が俺に話しかけてきた理由を聞いてみた。

「あら話が早くて助かるわ。率直に言うとななたに私の管理する幻想郷という所にきて欲しいのよ」

微笑を崩さず話す目の前女性には少しうさくささを感じるがそこはスルーする。

「幻想郷？それはどんな所なんだ？」

「この世界とは隔絶された、人と妖怪たちが共存する世界よ」

妖怪・・・か、まあ神様がいるんだからいても不思議ではない。

「なぜ俺をそんな所に招こうとするんだ？」

「あなたは強力な能力を持っている。人間がそういう能力を持っていることは珍しいの。だからあなたには幻想郷に来てもらって妖怪側に傾いているパワーバランスを水平にして欲しいのよ」

「行くのはやぶさかじゃない。俺も少しは刺激のある生活をしてみたいしな。だがいったとしてこの世界にはかえって来られるのか？」

俺は行くとしたらこの世界に置いていく母さんと父さん（言い忘れていたが俺の父さんは単身赴任で家にはいない）、東風谷や友人たちのことが気になり聞いてみる。

「もし来てもらえるなら永住してもらいたいわ。妖怪たちへの抑止力になって欲しいから」

もし行くなら永住か・・・

「わかった。俺は幻想郷に行く」

「頼んだ身としては聞きにくいのだけれどいいの？」

「いいんだ。俺の能力はもしかしたら暴走して大切な人たちを傷つけてしまつかもしれい。そんな事になるくらいなら俺はもっと強力な存在のいる所に行きたい。実際、俺もそういうところに憧れないって訳じゃないしな」

「わかったわ。それじゃああなたも準備があるだろうし3日後にまた迎えにいくわ」

「了解した」

そうやって女性は不気味な亀裂の中に入っていき亀裂が閉じた。

「ああ、もう7時過ぎちまったじゃねえか・・・今日は晩飯抜きか・・・」

そう言いこれからのいろんな人たちにする別れの挨拶を考えながら家に帰っていった。

〜3日後〜

あのあと帰ってからまずは母さんにあの女性と話したことを説明した。

母さんは「あなたのしたいことをして生きていけばいいのよ。なんたって私の息子なんだから」といい普通自分の息子にもう会えなくなるんだから泣いたり、引き止めたりするところだろうに……

でもこんな時でもいつもの母さんでいてくれてガラにもなく「ありがとう」といい別れの挨拶をすました。

東風谷からは「流斗さんがいなくなることで神気の補充がしにくくなりますね……もしかしたら近い内に私たちも行くかもしれないのでその時まで少しの別れです。」と案外前向きなことをいい八坂さん、諏訪子の2柱の神からわ「がんばって行ってこい!!」と力強いお言葉を賜った……

なぜ俺のまわりはこんなたくましい人ばかりなんだろう……

俺の能力について話していない普通の友人たちには、一人で遠くに引越す的なことをいってごまかした。どこにでもあるテンプレートな別れだったので割合させてもらう。

そんなことで別れの挨拶を済ませた俺は早朝4時という滅多に人が出歩くことのない時間に荷物を持ってあの女性とあつた公園に来ている。持ってきた荷物は朝ご飯と昼ご飯だけ。ちがう世界に行くのだから持っていくものは無いだろうと思いつつこなかった。そして朝ご飯を食べ終えた俺の前にあの亀裂が開く。

「迎えに来たわよ」

「まっつたぜ。ああ！そうだ。幻想郷とやらに行く前に2つ聞いたい事がある」

「何かしら？」

「一つは俺が昔から知りたかったことだ。」

「俺の能力名を教えてください」

「そう俺は能力で出来ることは知っているが正式な能力の名前がそうしてもわからなかったのだ。」

「じゃあ教えてあげるわ。あなたの能力は『流れを操る程度の能力』
よ」

「自分は動くものを操れるのだから能力名を聞いても『まあそんなところだろうな』程度で終わってしまった。」

「それじゃああと1つの質問。あんたの名前は？」

「始めて会った時に聞けなかったからな。名前をすることは大切だ。」

「私の名前は八雲やくも紫ゆかり。幻想郷で賢者と呼ばれている大妖怪よ」

「・・・自分で大妖怪なんていって恥ずかしくないのか？つと言いつうになるが問答無用であの黒い亀裂に落とされそうだから言わない。
「八雲か。それじゃあよろしく八雲」

「ええよろしく、流斗」

「そういってお互い握手する。」

「それじゃあこれから幻想郷に行くにあたって1つやってもらいたいことがあるわ」

「ん？まだ何かやることあるのか？」

「あなたにあたしの血を飲んでもらいたいの。あなたは能力は強力だけど体は人間、そんなことではひととき強力な妖怪には負けてしまっわ。だからあなたには大妖怪である私の血を飲んで限りなく妖怪に近い人間になってもらっわ。幸いあなたには大量の潜在霊力があつて私の妖力に耐えられるしね」

そういつて亀裂から試験管に入った血を差し出してくる。

「生き残るためとはいえ血を飲むのは抵抗があるな・・・ゴクゴク」
血を飲むとういのはいささか気分が悪いので一気に飲んでしまう。

「ん？何も起きないな・・・」

「時間をおいてゆっくり私の妖力を取り込んでいけばいいわ。大体1年程度で理想の体になるわ」

「わかった」

さっきの言葉で用は終わったらしく、八雲が真剣に話しかけてくる。

「じゃあこれからあなたを幻想郷に連れて行くわ。あっちについては人里に行つて博麗の巫女に会いに行きなさい」

「わかった。それで幻想郷にはそうやっていくんだ？」

プロローグ4（後書き）

流斗がやっと幻想入りしました。

ここらで少し読者様に聞かせてもらいたいことがあります。

それは流斗がどこに落ちるかです。

候補は

- ・ 魔理沙の家よりの魔法の森
- ・ アリスの家よりの魔法の森
- ・ 紅魔館
- ・ 永遠亭
- ・ 冥界

の5つです。

どこに行っても最終的に人里経由で博麗神社に行かせます。

「ここにいかせたい！！」という意見がありましたらぜひお願いします。

とりあえず期間は明日の午後7時までとさせていただきます。

なにも意見がもらえなかったら自動的に人里近くにおちます。

それとあとで主人公設定も上げておきますね。

それではよろしくおねがいします。

主人公設定（幻想入り前）（前書き）

今日の内^に幻想入り前の主人公設定上げておきますね

主人公設定（幻想入り前）

名前 たかみね 高峯 りゅうと 流斗

種族 人間

能力 流れを操る程度の能力

容姿 黒髪・黒目の典型的日本人

顔は上の中ぐらい

身長174cm

体重68kg

髪型 某運命と名の付くアニメの主人公衛士と同じよう

な感じ

服装 上は黒か白の無地のシャツ

下はジーンズ

性格 よほどの事がないかぎり大体適当に過ごしている。

だがピンチや困ったときには何喰わぬ顔で助けてくれる

キレてもあまり見た目は変わらない静かに怒るタイプ

そんないつもの時とのギャップで結構もてる

原作キャラは今の所東風谷が流斗に惚れている

主人公設定（幻想入り前）（後書き）

妖怪化したあとでまた設定が変わるんでそのときにまた上げさせてもらいます。

実は妖怪化以外にも設定が変わるイベントがあるんですけど、それはもう少し後のお楽しみです

第1話 く落ちた先での出会いく（前書き）

やっと本編の始まりです。

主人公は永遠亭の近くに落ちることになりました。

それでは楽しんでいってください。

第1話 　く落ちた先での出会い

俺がスキマの中を落ちていると、激しいめまいとともに俺の意識が遠のいた・・・

「・・・ん？ここは？幻想郷に着いたのか？」

気づいたら俺は地面に仰向けに倒れていた。俺はどうやらスキマの中を落ちているさいに気絶してたみたいだな・・・

(いつか八雲に会った時に仕返ししてやる……)

そう心に誓いながら周りを確認してみる。

「……ここが幻想郷か……まわり全部竹で覆われてて何も確認
できん」

周りは全て十数メートルの竹に覆われており、見えるのはまだ完全
に日が昇りきつてない空だけだ。

「とりあえずまっすぐ歩いてみるか。ひょっとしたら民家があるか
もしれないからな」

そういつて新しい世界の新鮮な空気を堪能しながら歩き出していつ
た。

「なにも見つからねえじゃねえか!!」

歩きはじめてから1時間がたったのに視界にはいるのは竹!竹!竹!
!いつになったらこの竹林地獄から出られるんだよ!!

「さすがに疲れたな・・・あそこの石に座って休憩しよう・・・」

そうやって座りやすそうな平べったい石に近づいて行く。

だがここで思わぬ事が起こった。

「うおっ!!」

俺はあのスキマに落ちたような感じを味わった。だが今回はスキマではなく単純な落とし穴トラップだった。

「なんだ!?!この疲労で休もうとした奴を的確にねらい打ちするよ
うな罠は!?!仕掛けたやつかなり性格悪いな!!」

落とし穴はかなり深く自力では出れそうもない。八雲には空中に投げ出されて尻をつつわ、1時間も歩き回って竹林から出れないわ、あげくに疲労がたまつたこの体に落とし穴かよ・・・こっちに来てからいやなことばかりだな・・・とりあえず助けを呼んでみるか。

「おおーい！！誰かいないかー！？落とし穴にはまって出られないんだー！！」

大声で言ったもののやはり返事はない・・・まあこんな事で助かるとは思ってなかったが返事がないと悲しくなるな・・・どうすれば人に気づいてもらえるか考えるk「どこにいるんですかー！？助けに来ましたよー！！」考えなくてもよかつたな。

「ここだ！！たすけてくれえー！！」

「今ロープを出すので待ってて下さいー！！」

素直に言葉を信じ少しまっているとロープが上からたれてくる。それをつかんで登る。

「よっ、ありがとうな。助かつたぜ」

登り終わり落とし穴から脱出した俺は相手に礼を言う。

「いえいえ、どういたしまして・・・もともとこっちが悪いんですけどね」

最後ボソッと何か言っていたがよく聞こえなかったから気にしないことにした。

助けてくれた人を見てみるとウサギのような耳が頭についており少なくとも人間ではないことがわかった。

「君はもしかしたら妖怪か？」

「そのようなものです。でもあなたみたいな人間がどうしてこんな所にいるんですか？」

苦笑して質問に答えたあとキョトンとしながら俺になぜここにいるのかを聞いてくる。

「少し事情があつてな、外の世界から来るときにここに落ちたんだ。これからこつちに住むことになつるから自己紹介しておくよ。高峯流斗だ、よろしく」

「私は一鈴仙・優曇華院・イナバ《れいせん うどんげいん》です。鈴仙と呼んでください。よろしく願います。それと人里で薬の訪問販売もしているのでそちらもよろしく願います」

お互い握手しながら自己紹介をする。

「鈴仙、少し聞きたいんだが人里に行くにはどうすればいい？」

「人里に行きたいんですか？それならここからあの竹と竹の間をまっすぐ行けば人里へ案内してくれる人がいますよ。折角お会いできたんで私が案内できたらいいいんですけど、今は薬を作る為に必要な薬草を集めてるとこなので・・・」

どかがシヨボンとしたか霧囲気を出す鈴仙。なんか小動物を見ているみたいでかわいいな・・・

「いや案内出来る人までの行き方を教えてもらえただけで十分だ。ありがとな」

そういいながら頭を撫でてやる。その瞬間「はう／＼／」といいながら鈴仙の顔が真っ赤になる。

「おっと、すまん。いきなり頭さわられたら嫌だよな」

いつまでも触っている訳にもいかないので手を離しながら言う。

「いえ、そんなことないでしゅ・・・」

顔を伏せてそんなことを言う。思いつきり噛んできるところもかわいいな。

「それじゃあ俺は行くよ。また会えたらいいな、じゃあ」

まだ顔の赤い鈴仙にむかって別れを告げる。

「はい／＼／それじゃあまたいつか／＼／」

うさ耳の少女鈴仙を尻目に俺は教えてもらった道へと入っていった。

しばらく歩いていると昔ながらの日本家屋が見えてきた。鈴仙が言っていた案内役がいるのはここか？

「すまない、ここに人里へ案内してくれる人が居ると聞いてきた」
家の戸をノックしながらすこし大きい声で言ってみる。

「それはあたしのことだよ」

後ろから声が聞こえてきて少し驚いたが俺は声が聞こえてきた方向に向けた。

そこには背中まで伸ばした髪に赤いリボンをつけ、これまた赤いモンペを着た少女がいた。

「君が案内人か・・・俺は高峯流斗。これからこの幻想郷に住むことになった人間だ」

「私は藤原ふじわらの妹紅めいこう。あんたが言った通り、この竹林に住む案内人だ」

とりあえず自己紹介をして握手する。そしてなぜここに居るのかを簡単に説明した。

「そうか・・・わかった！人里までしっかり案内してやるよ」

「悪いな、助かる」

「気にすんな、どうせ暇だしよ」

笑顔でそんなことを言ってくれる。なかなか気さくでいい奴だな。じゃあ早速案内してもらおうか。

「それじゃあ早速頼むよ」

「了解了解、しっかりついてこいよ」

そう言って人里でむかうであろう道へ歩き出す。俺はそんな藤原の隣について歩き出した。

「ここまでありがとうな、妹紅」

「いいっていいって、こっちもリュウと話してて楽しかったからな」

今は人里のすぐ手前にある門の前にいる。自分でもなぜあんなに歩いて着かなかつたのか不思議なくらいあっという間についた。俺の苦勞は一体なんだっただ…

歩いている間妹紅と話をし、俺たちは下の名前で呼び合う程度に仲良くなった。なぜ妹紅が流斗ではなくリュウと単純にそっちの方が

呼びやすいらしい。

そんなことを考えていると門番に話をつけにいった妹紅がこっちに戻ってくる。

「門番には話をつけておいたぜ」

「そんなことまでしてもらって悪いな、ありがとう」

いろいろ手を焼いてくれる妹紅に礼を言っておく。

「いいんだよ、暇だって言ったら？リュウはこれから神社に行くんだろ？」

妹紅には俺がこれからどうするか、ここに来るまでに話していた。

「ああ、人里で博麗神社の場所を聞いて神社に向かえ、って八雲が言ってたからな」

「まあがんばれよ。あそこの巫女は恐ろしく強いからな」

妹紅は一度会ったことがあるのか顔を青くして俺に言った。

「せいぜい気をつける事にするさ、じゃあな妹紅」

「ああ、また会おうぜ、リュウ」

そうやって別れを済ませ俺は人里へ入っていく。

(まずは神社がどこにあるのか里の人に聞かないとな・・・)

第1話 く落ちた先での出会いく（後書き）

博麗神社には次の話で行く予定です。

とりあえず鈴仙にフラグを立てて置きました。
鈴仙ファンの方はホントすいません。

第2話 く八雲のねらいく（前書き）

昨日は投稿できなくてすみません（汗）

今回は博麗神社に行きます。

第2話　く八雲のねらいく

妹紅と別れて人里に入った俺は、博麗神社までの道のりを聞くために人を探していた。やはり幻想郷に来た時間が早すぎたのでそれなりに時間がたった今でも人の影は見られない。

そんなことを考えながら人の影を探していると、前方から人が歩いてくる。

「あの人に聞いてみるか」

俺は博麗神社までの道を聞くためにその人に近づいていった。その人は腰まで伸ばした白い髪の上に変な帽子をかぶった大人な感じの女性だった。

「すまん、ちょっと道を聞きたいんだが・・・」

「ん？ああ、いいぞ」

話かけると礼儀正しく俺に向き直ってくれる。

「俺は今度から幻想郷に住むことになった流斗だ、よろしく」

「私はこの里で寺子屋を開いている上白沢かみしろさわ慧音けいねだ。慧音と呼んでくれ。こちらこそよろしく」

そうやって俺は自己紹介した後、握手をして挨拶をすませた。

「でどこまでの道を聞きたいんだ？」

「博麗神社に行きたいんだが、どこから行けばいい？」

「ああ、それならあつちの門から里をでて少し歩くと川がある。その川を川沿いに歩いて行けば石段がある。その上が博麗神社だ」

「そうか。ありがとう、慧音」

質問にわかりやすく答えてくれた慧音に礼を言っておく。

「ところで流斗は外の世界から来たみたいだが、住む所はあるのか？」

慧音は当然の疑問を聞いてくる。そう言えば、俺はどこに住めばいいんだ？八雲は博麗神社に行けと言っただけで何も聞いてないし・・・とりあえず博麗神社に行った後に決めるか。

「博麗神社の用が終わってから考えることにするよ」

「そうか。もしそのことも含めて困った事があつたら相談しに来てくれ」

「ああ、ありがとう。それじゃあそろそろ行くよ」

「そうか、今は夜ではないから妖怪が出ることはまず無いだろうが、気をつけていけよ」

心配してくれる慧音に礼をいいながら博麗神社に向かって歩き出した。

慧音の言われたとおり里から出てしばらく川沿いに歩いていると、
いい感じに太陽が上に昇ってきたところで石段が見えてきた。

「ここを登れば博麗神社みたいだな」

俺は少しずつ石段を登っていく。この石段は結構な段数がありそう
で登るのも一苦労だ。

「はあはあ・・・ふう、やっと着いたか」

石段を登り終わり息を整えながら周りを見てみるとそこには守矢神社のような古いが貫禄のある神社があった。

「なかなか立派な神社だな。ん？あれは巫女か？」

境内には、紅白の袖が無い巫女服みたいなものを着た少女がゴミを掃いていた。

(とりあえず話しかけよう)

息も整ったところで、話しかける為に巫女に近づいて行く。ある程度近くに行くと巫女は掃除するために俺に背を向けていたのだが感じがいらしく俺に気がつき、話しかけてきた。

「あんた誰？」

背後から近づいた為か、少し警戒されながらその少女は言う。

「俺は流斗、妖怪の賢者、八雲紫にここに行けと言われてきたんだが何か聞かされていないか？」

八雲がこの巫女に何か伝えているかもしれないと思い聞いてみる。案の定巫女は何か聞かされていたようで警戒を解いた。

「ああ、あんたが外から来た能力持ちの人間ね。私はこの博麗神社の巫女博麗^{はくれい} 霊夢^{れいむ}よ。霊夢って呼んでもらってかまわないわ。紫にはあなたがここに来たらすこし面倒を見て欲しいって頼まれてるわ」

「面倒を見て欲しい？」

さっきの話で気になった事を聞いてみる。

「あんた、紫の血を飲んだでしょう？妖怪化が完全に終わるまでの1年間くらい、戦闘に関する事を教えてやって欲しいってことらしいわ。主に霊力の使い方をね」

そういうことか。俺はただ能力を持っているだけの一般人。そんな奴では妖怪たちへの抑止力にはならない。だから八雲は博麗神社で戦闘に関してこの少女に教わらせるために最初にここに来いと言っただんだな。

「そういうことが。なら1年間よろしく頼む」

「私が教えられるのは霊力の使い方とこの世界の戦闘方式くらいよ。能力とかは自分で努力してものにしなさい」

「ああ、わかっているさ」

これから1年間、しっかりがんばるとするか・・・ん？そういえば・・・

「霊夢、俺がどこに住めばいいか八雲になにか聞いてないか？」

慧音との住む所の話を思い出したので霊夢がなにか聞かされていないか聞いてみる。

「紫からは何も聞いてないから、とりあえず1年はここに住みなさ

い。人里とかに住まると教える私もめんどくさいのよ」

なん・・・だと!? 霊夢は町で歩いていけば10人中10人が振り向くような美少女だ。そんな少女が普通1年間一つ屋根の下で住め、というか!? しかもただめんどくさいという理由だけで! 俺、かなり適当な性格だがこいつはそれ以上だな。まあ俺も男だし役得ということでした承しておくか。

「わかった、それじゃあこれからよろしく頼む」

「よろしく。あと住むことになったんだからご飯の支度とか、境内の掃除とか手伝ってもらうからね」

自分が楽するために俺を利用しようとしているのがバレバレだな。まあそういうのは嫌いじゃないから文句はないが。

「住まわせてもらうんだからそれくらいやるさ」

「よし!!!・・・今日は住む準備も出来てないし修行は明日からになるわ。神社に帰るわよ、リュウ」

そういつた霊夢は話しながらもしていた掃除を終えて神社を指さしていた。

(あいつちっちゃくガッツポーズとりやがった・・・見えてないとも思っているのか?)

そんなことを思いつしこいつの性格がわかったような気がしてきた・・・

「はあ・・・了解」

掃除の終わった霊夢と一緒に神社に戻りながら、これからこいつに
こき使われるんだろうな、としようもないことを考えながら今日一
日は住む準備をしてすぎていった。

第2話 ～八雲のねらい～（後書き）

これから流斗が修行します。実はこれが前に話していた設定が変わるイベントです。

ここでまた皆様に聞きたいことが・・・

流斗の修行風景を書くかそのまま吹っ飛ばすか

のことで悩んでいます。

明日の正午まで待ってるので皆様には意見をもらえるととてもうれしいです。

それと平行して感想ももらえると作者のモチベーションも上がるので出来ればいいので感想もよろしくお願いします。

こんなダメダメな作者ですがこれからもよろしくお願いします。

第3話 く外の世界の少女く（前書き）

修行風景を書くことにしました！

1く3話くらい修行が続くかもです・・・

第3話 外的世界の少女

この博麗神社にきて修行を始めてから1週間たった。

この1週間、以外にも霊夢は俺に仕事を全部押しつけたりしなかった。境内の掃除を分担してやったり、ご飯は当番制でやったりと以外に自分でもしっかりやっていた。修行の方もしっかり教えてくれた。この世界の戦い方はスペルカード方式というもので、相手か自分のスペルカードという自分の技を封じこめた札を全て攻略されるか、どちらかの体力が無くなるかという人間でも妖怪に対抗できる方式らしい。実際に霊夢は俺がここに来るまでに起きた二つの異変『紅霧異変』と『春雪異変』を解決しているらしい。そのスペルカード方式について初日に教えられ俺は目下、スペルカードの作成と霊力と妖力を使っての身体能力強化の修行をしている。霊力と妖力は使う者が人間か妖怪かの違いだけなので事実上どちらにも分類している俺には妖力を使う特訓もしている。

「・・・ふー、今日はこのぐらいにしておくか」

今日の身体能力強化の修行が終わり、ここからは俺の自由時間だ。

俺の1日のサイクルは

AM 6 : 00 起床&霊夢と一緒に境内の掃除

AM 7 : 00 朝ご飯

AM 8 : 00 霊夢のパーフェクト幻想郷教室

AM 10:00 筋力トレーニング

AM 11:00 自分のスペルカード考察&作成

PM 0:00 昼ご飯

PM 1:00 霊力と妖力の身体能力強化

PM 2:00 自由時間 今ここ

PM 5:00 霊夢と模擬戦

PM 7:00 夕ご飯

PM 8:00 就寝

こんな感じだ。

一番大変なのは、霊夢との模擬戦だな・・・あいつ、俺を鍛える為だとか言いながらおもしろ半分でボコボコにしてくるから・・・いつか八雲共々仕返ししてやる・・・

まあ今は自由時間だ。能力の修行でもはじめるk「リュウ、ちょっとおつかい行って来てくれない？」能力の修行は中止だな・・・
「何を買ってくればいいんだ？」

神社の縁側から出てきて俺に話しかけてきた霊夢に近づきながら聞いてみる。

「お醤油がさっきのお昼ご飯で切れちゃったから買ってきて。はい
お金」

そう言いながら俺にお金を渡してくる霊夢。

「わかった。そのかわり今日の模擬戦は中止にしてくれ。能力の修行は毎日しておきたいからな」

「わかったわ。じゃあいつてらっしゃい」

今日の模擬戦が無くなったことを喜びつつ俺は人里に向かっていった。

「さすがに結構重い・・・」

人里から醤油を買ってきて現在は博麗神社に向かって歩いてる最中だ。人里では慧音に会って1年間程度博麗神社に住み込みで修行することを伝えておいた。慧音は笑顔で「がんばれよ!」と喋って来てくれた。うれしかった。

「慧音も応援してくれてるしがんばるかな・・・ん?あれは?」

前のでかい木の下に誰かが座っているのが見えた。近づいていくとそれは白く長い髪はぼさぼさで着ているワンピースのような服もぼろぼろになっている小さな少女だった。

「こんなところに座ってどうしたんだ?」

俺は少し心配だったので座り込んでいる少女に近づいて話しかけてみる。

「ひ!・・・あなたも・・・私をいじめるん・・・ですか?」

俺が話しかけた途端、びくびくしながら俺にそんなことを聞いてくる少女。いじめる?なんの事だ?

「いじめなんてするわけないだろ?ところで体の傷は大丈夫か?」

よく見ると服や髪だけではなく、少女の体も切り傷や擦り傷などの

軽傷ではあるが傷が付いていたので俺はさらに心配になり少女に尋ねてみる。

「あなたは私を心配してくれるんですか？」

大丈夫か？と聞かれたことが予想外だったらしく驚いた表情で聞いてくる。もしかしたらこの子・・・

「当たり前だ・・・もしかしてお前は外の世界でから逃げてきたのか？」

俺が思いついた事を聞いてみる。

「・・・はい・・・実は・・・」

話しを聞いてみると、その少女は外の世界で人間に見つからないように各地の妖怪の隠れ家を転々としていたみたいだ。この少女は生来かなり強力な妖力を生まれてきたらしく、今でも残っている人間の霊能力者にいるだけで存在がばれてしまい、人間から離れて平和に暮らしたい妖怪から虐待をうけていたらしい。そんな時、スキマをつかってあらわれた八雲から幻想郷に来ないか？といわれてこの世界にきて今にいたるらしい。

「そうか・・・今までつらかったんだな」

話が終わったあと俺はその子をぎゅっと抱きしめていた。今まで感じた事のなかった温もりをこの子に与えてあげたかったからだ。

「あ／／・・・ひつく・・・ふえ～～～ん！！」

抱きしめられた少女は泣き出した。まるでやっと安心できる場所を見つけた子供のように・・・

俺は少女が泣きやむまですっとその子を抱きしめていた・・・

「お前の名前を覚えてくれないか？」

「ひつく・・・癒紅あゆま・・・です・・・」

「そうか。俺の名前は高峯 流斗。それじゃあ癒紅、俺と一緒に来ないか？」

俺は癒紅の話しを聞いていた時から考えていた事を言った。

「え??？」

癒紅はキョトンとした愛らしい顔でそう言う。

「ああ。俺も癒紅とはすこし違うが強力な能力があったからこの世界にきた。そして外の世界にはもう戻らない・・・だから身内が一人もいなくて寂しいんだ。だから癒紅、俺と一緒にいかないか？」

俺は、ガラにもなく寂しいという理由で癒紅と一緒にいかないかと言った。

「自分勝手な理由ですまないが・・・」

「そんな・・・そんなことないです!!私、生まれてからそんなこと言われたことないからとっってもうれいす!!でも私なんかでいいんでしょうか?」

すごい勢いで俺の言ったことを否定しながら俺に弱々しく聞いてく

る。

「癒紅だから俺は一緒にいたいんだ。いいか？」

「はい！わたしでいいなら喜んで！！」

さっきまで話していてまだ一度も見えていないような満面の笑みを浮かべてそういう癒紅。

「じゃあこれからよろしくな、癒紅」

「はい！！」

こうやって癒紅という連れができた。

あのあと博麗神社に帰ってから霊夢に癒紅のことを話し博麗神社と一緒に住むことになった。そのあと八雲が博麗神社やってきて癒紅の能力について教えてもらった。癒紅の能力は『癒しと加護を与える程度の能力』だそうだ。だがやはり俺のようにまだ妖力や能力についての使い方がわかってないらしくここで俺と一緒に修行しろとのこと。癒紅は俺と一緒にがんばるといいとてもやる気に満ちあふれていた。

(これからまた忙しくなりそうだな)

そう思いながら俺は癒紅がここに住むためのいろいろな準備をしていった。

PS・八雲に仕返ししようとしたらスキマに落とされそうになったのであきらめた。

第3話 く外の世界の少女く（後書き）

流斗のパートナーともいえるオリキャラをだしました。
この子を考えるのにかなり時間をつかいました・・・

今回も構成があまい作りです・・・すみません

感想や誤字の報告待ってます

第4話 く俺の実力は？く（前書き）

なんやかんやあって修行中のことを書くのは前回だけです・・・
すみません・・・

気が向いたら番外編としてだしてみたいと思います。

第4話 く俺の実力は？

癒紅が来てからあつという間に1年たった。

ん？話の展開が早すぎる？それは全て作者が悪い。だがあいつも色々あつて悩んでいるんだろう・・・できれば生暖かい目で見てやってくれ・・・

作者（ありがとう、流斗！！）

気にすんな。

よし、展開が早い理由と作者の慰めも終わったところで修行中であつたことと修行の成果について話しておこうか。

まず修行中であつたことから。

癒紅に出会つてから1週間後くらいだったかな？身体強化の修行をやっているときになり後ろからとつともない衝撃が来て吹っ飛ばされた後に俺がいた所を見てみると、霊夢と同じくらいの年の白黒な服を着た金髪の少女が倒れてたんだ。その少女の名前は霧雨 魔理沙まりさといつて活発で元気のいい男まさりな少女だ。そんなことがあつた後、俺は魔理沙と知り合いになつた。そのことで後悔したのは一つだけ。霊夢との模擬戦に魔理沙も参加するようになっただけだ！！あいつも霊夢と一緒にあもしろ半分でボコボコにできて、マスパを直撃した時は死ぬかと思つたぜ・・・

他にも真つ赤な趣味の悪い館に霊夢のおつかいでいった時に侵入者だと思われて中国出身の妖怪紅ほん 美鈴めいりんと時を操るナイフ使いの女性せいじろ十六夜じゅうろくにゃ 咲夜さくやにボコられるわ、修行中に来た酔っぱらいの鬼伊吹いぶき

萃香に、修行をつけたげるよ とボコられるわ、散歩に出かけた時に見つけたひまわりが沢山咲いているところで会った緑色の髪をしたドS風見^{かさみ} 幽香^{ゆうか}にこれまたボコられるわ・・・てあれ？俺ボコボコにされてばっかじゃない？

とまあいろいろあつた訳だ・・・その度に癒紅の世話になつてるんだけどね。ああこれは癒紅の能力からわかると思う。

そのこともふまえて修行の成果について話そう。

癒紅はこの1年で自分の力をほぼ全快で使えるようになった。妖力を使った戦闘はだいたい能力を使った咲夜と互角に戦える。だが元々癒紅は後方支援に特化した存在でその能力は戦闘でもかなり使える。癒紅は自分の視界に入っている存在なら即死でないかぎりどんな傷でも癒すことが出来る。例えば腕がちぎれたりしても。だが傷の深さで使う妖力の量が決まるのでちぎれた腕を修復するとなると癒紅の全妖力の3分の1は使ってしまう。まあこの幻想郷で腕がちぎれるなんてことはまずないのでめったなことでは癒紅の全妖力が無くなるようなことはない。

癒紅の加護の能力についてはいろいろな使い道がある。幸運の加護、某運命の名がつくアニメの矢よけの加護などを付与することも出来るし、単純に結界を張ったりもできる。付与する方は持続時間は1日程度で付与したときに癒紅が使った妖力の量で効果の大小がきまる。結界の方もこれも妖力を込めた量で効果の大小が決まり、癒紅が全力でやれば幽香の全力のマスパは楽では無いだろうが防げる。

そして俺だが、紫の血を飲んで限りなく妖怪に近い人間になった。

髪の色は紫の様に純粋な金髪ではなく黒が混ざって濁った金髪になった。それと合わせて目の色も片目だけが髪と同じ色になった。身

体能力も霊力や妖力を使わなくても外の世界のオリンピック選手以上の事が出来るようになった。

飲んだ血の量はあまり多くはなかったのでこれ以上はもう妖怪化は進まないようだ。

格闘だが、これは萃香や幽香が主に肉弾戦しかしないのでかなり成長してしまった。俺の使う武器は槍。なぜ槍かと言うと俺が槍を始めてみた時、かっこいい！！と思ったからである。そこ！！厨二とかいうな！！技量はまあ幽香と張り合えるくらいとだけ言っておこう。弾幕の方は避けるのは得意なんだが弾をうつののは苦手だ。やっぱり男なら肉弾戦だよな！！まあこんなあ感じでスペカも3枚ぐらいしかも持ってない。

そして肝心の能力の方だが、時間に関しては咲夜と同じくらいにはできる様になった。だが俺の能力は弾幕で使うと、弾の流れを操って全部被弾出来ないようにできるので弾幕では使わないようにしている。肉弾戦ではガンガンつかうけどなwww

俺の修行結果はこんなものである。

長々と話していた？が俺は今一つ試したい事がある。

それは俺がどれくらい強いか、ということだ！ん？なんでこんなこと考えてるか？いくら適当な俺でも性別は男！！自分の強さを計りたいと思うのは男として当然だろう！？

自分が幽香と全力でも戦えることは知っている。

だが！！幽香が地上最強というわけではないはずだ！！

だから俺は幽香より強い奴と戦ってみたい!!

そんなことを考えていてでた結論は・・・紫に聞いてみよう

「お~~~~い!!紫い~~~~!!」

ちなみに紫はこの1年でちよくちよく修行を見に来ていてそのときにで下の名前で呼ぶように言われた。本人曰く、八雲と言われるのはむずがゆいらしい。

「んんん~~~~なに~~~~?流斗お~~~~なんかあ~~~~用お~~~~?」

そういつて俺の声が届いたらしく、スキマから寝間着が着くずれてる眠そうな紫がでてくる。なんかエ~~~~ゲフンゲフン!!

「修行終わって自分の力がどれくらいか試したいんだが~~~~いいとこ知らないか?」

自分の煩惱をうち消し紫に聞く。

「ん~~~~あなた幽香とは互角に戦えるのよね?それ以上強い相手となると~~~~」

日の下に出てきた事で目が覚めてきた紫が俺の質問を聞いてうんとうなる。そしてなにか思いついた様に俺にいつてくる。

「それなら、迷いの竹林にある永遠亭というところに住んでいる姫に聞いてみるといいわ」

「その姫とやらに聞けば俺の実力が試せるのか？」

「まあいつてみてからの楽しみよ」

そういつて笑顔で言うてくる。うさんくさいにおいがぶんぶんするぞ……

「……了解だ。じゃあちよっくらいつてくる」

怪しいと思いつつ行くなって、俺は自殺願望者か！まあ自分の実力を試すならこれくらいでちよっどいいよな。……一応癒紅を連れて行こう。

そう思いながら紫と別れたあと神社で寝ている癒紅を呼ぶ為に神社に戻っていった。

第4話 く俺の実力は？（後書き）

そういうことで永遠亭に行く事になりました。
後で流斗と癒紅の設定を上げておきますね。

感想&誤字を受け付けてます

どんなことでもいいので感想もらえるとうれしいです。
首を長くしてお待ちしています。

主人公&癒紅設定（修行後）（前書き）

主人公と癒紅の設定をあげておきますね

主人公&癒紅設定（修行後）

名前 たかみね 高峯 りゅうと 流斗

種族 限りなく妖怪に近い人間

能力 流れを操る程度の能力

容姿 黒髪 髪は黒がまじって濁った金髪

黒目 濁った金と黒のオツドアイ

顔はかわらず上の中ぐらい

身長 174cm 176cm

体重 68kg 70kg

髪型 変わらず某運命と名の付くアニメの主人公と同じよう

な感じ

服装 上は黒か白の無地のシャツ

下はジーンズ

性格 基本は幻想入り前と同じだが能力を隠さず使える

ことにより少し開放的な性格になった

恋愛に関しては今の所東風谷、鈴仙、癒紅が流斗に

恋愛感情を抱いている

名前 あゆ 癒紅

種族 妖怪

能力 癒しと加護を与える程度の能力

容姿 髪はストレートで腰までの長さがある

色は銀に近い白

目の色は薄い水色

身長 154 cm

体重 47 kg

見た目は完璧な口リ

服装 上下つながっている白いワンピース

性格 見た目に反さず甘えん坊

特に流斗のことを兄であり好きな人と思っている

流斗を好きになった人物にも意外に普通に接する

流斗史上主義ではないがでも一番大切なひと

主人公&癒紅設定（修行後）（後書き）

なにかたりない情報とか知りたいこととかあったら報告してください。

報告があったら次の話で質問コーナーでも設けようと思います。

それではよろしくおねがいます。

第5話 〽再会〽 (前書き)

今回は永遠亭に行きます!!

第5話 〱再会〱

「癒紅？ちよつといいか？」

もしもの為に癒紅も永遠亭に来てもらおうと思い、癒紅を起こす。

「んん・・・んん！どうしたんですか、流斗さん？」

俺が声をかけるとともに癒紅が起き、伸びをしたあと俺にそう聞いてくる。

「ちよつと、ヤボ用でな。もしかしたら怪我するかもしれないから付いてきてくれないか？」

紫が怪しい笑顔を見せるときは警戒しておくにこしたことはない。

「修行が終わってやることもないから別にいいんですが、私が治療しないといけないほど重傷になる予定なんですか？私、流斗さんがそんなことするのはあまりみたくないです・・・」

「大丈夫だって。もしもの為の保険だから癒紅が心配する様なことにはならないさ」

俺が傷を負うのが嫌ならしく悲しそうな顔をする癒紅。そんな癒紅の頭を撫でながら安心させる様にそう言う。

「ならいいんですけど／＼／」

照れながらも了承してくれたっばい癒紅。これでもしもの事があつ

ても大丈夫だな。

「じゃあ早速いくか、癒紅は準備いいか？」

今しがた起きたばかりの癒紅に準備がいるか聞いてみる。

「はい。特に持っていくものもなさそうなので大丈夫です。それでどこに行くんです？」

そういえばまだ癒紅には行き先言っていなかったな。

「迷いの竹林にある永遠亭ってところだ。俺は場所知らないんだが妹紅っていう案内してくれそうな奴がいるからまずはそいつの所に行こう」

「はい」

そういつて迷いの竹林に向かって癒紅と一緒に飛んで行く。妹紅いるといいけどな。

〈少年・少女移動中〉

癒紅と一緒にしばらく飛び迷いの竹林の前に降りた。迷いの竹林は上から飛んでいても竹林の中が見えないそうだからな。こんな知識を知っているのも霊夢のパーフェクト幻想郷教室のおかげだぜ！

そしていざ妹紅の家に行こうとした時俺は重大なことを思いだした。

「俺、妹紅の家までの行き方覚えてないや・・・」

あの時からもう1年。毎日通っているならまだしも、一回通っただけの道を覚えているはずもない。

「ええ！？知らないんですか!？」

「すまん、道を覚えていないのをすっかり忘れていた・・・」

俺は自分のうつかりに絶望しながらよつんばいになってうめく。く！まさかこんな事になるとは!!

「お前ら、こんなところで何やってるんだ？」

絶望している俺に後ろから誰かが話しかけてくる。

(こんなところでよつんばいになってたらさすがに不思議に思われるよな・・・)

そんなことを思いながら後ろに振り返って返事をしようとする。

「ああ、ちつと俺のあてがはずれてな。ちつと絶望してたところ・・・つて!!妹紅!!」

俺が振り返った先にはポケットに手を突っ込んだ妹紅がいた!!なんという奇跡だ!!神様に感謝せねば!!ありがとう八坂さん!!

「ん？なんであたしの名前知ってた？お前とは初対面のはずだが・・・」

そういつて首を傾げる妹紅。あれ？1年経って妹紅は俺の顔忘れちゃったのか？

「俺だ、流斗だ！1年経って忘れちゃったのか？」

「？リュウは黒髪・黒目だったはずだぞ？」

ん？黒髪？黒目？・・・ああー！！忘れてた！！俺、紫の血飲んで妖怪化してから髪と目の色が変わっちゃったんだ！！

「妹紅、とりあえず俺の話聞いてくれないか？」

「???まあ聞くだけならいいが・・・」

会ってからずっとはてな顔だった妹紅に俺が妖怪化したことについて話していった。

〈少年説明中〉

「・・・ということであの俺の髪と目の色が変わっちゃったんだ」

「そういうことだったのか悪いな、リュウ。気づいてやれなくて」

妹紅には俺が紫の血を飲んで1年かけて修行しながら妖怪化したことを話した。そして妖怪化した副作用で髪と目の色が変化したことも説明した。俺の説明で納得出来た妹紅はすこし困った顔で俺に謝ってくる。

「ところでリュウ。その子は誰だか教えてくれないか？」

癒紅の方を見ながら妹紅は聞いてくる。そういえば妹紅は初対面だったな。

「こいつは癒紅っていうんだ。外から紫に連れられてきた妖怪だ。外から連れられてきた時に偶然俺と出会ってそれから一緒に1年間修行してたんだ」

俺は癒紅について簡単に妹紅に説明する。

「癒紅です。よろしく、妹紅さん」

「よろしくな、癒紅」

「自己紹介も終わったところで妹紅、悪いんだが永遠亭って所に連れて行ってくれないか？ここに住んでいるお前なら知ってるだろ？」

誤解もとけて癒紅の紹介も終わったから妹紅に案内の件を頼んでみる。すると妹紅は顔をしかめて俺に言ってきた。

「案内するのはかまわないんだが、永遠亭が見えないぐらいのところでだぜ？」

「え？何故ですk「それでいいぜ」「

妹紅の顔を見て何か嫌な事があることを察した俺は、癒紅の言葉を遮り了承した。あとで癒紅にはこのことについて触れない様についておかなくちな。

「じゃあ行くか」

どこかさつきより怒った感じで立ち上がった妹紅。そして迷いの竹林に入っていく。俺と癒紅は黙って妹紅に付いていった。

少年・少女移動中

歩いている最中、妹紅はいつもの感じに戻り世間話をしながら歩いていた。話しながら進んでいると妹紅が竹が綺麗に避けている道の目の前で止まった。

「あたしが案内できるのはここまでだ。この竹の間を歩いていけば永遠亭に着く」

妹紅は笑顔でそう言ってくれる。

「十分だ。ありがとう妹紅、助かったよ」

「助かりました。ありがとうございます、妹紅さん」

ここまで案内してくれた妹紅にお礼を言う。

「こつちも話できて楽しかったよ、それじゃあな」

手を振って来た道を帰っていく妹紅。俺たちは手を振りながらそれを見送った。

「じゃあ行くか、癒紅」

「はい、行きましょう」

そう言い合った俺たちも竹の道を進んでいった。

少し歩いたところで目に武家屋敷の様なものが見えてきた。あれが永遠亭みたいだな。

永遠亭はかなりの大きさを外の世界の普通の1戸立て3つ分くらいはありそうだ。それに見合うような庭も付いている。なるほどこれなら姫といわれるような人が住んでいても不思議はない

俺たちは戸の前まで行った。そして扉を2回叩く。

「すまない、ここに姫と呼ばれる人がいると聞いてきた。誰かいな
いか？」

永遠亭にいる人に聞こえる程度の声でそう言い返事を待つ。……
……返事がない。

「誰も出てこられませんね……」

はてな顔で言う癒紅。

(声が小さかったか?)

今度はさっきよりかなり大きめの声で言ってみる。

「すまない!ここに姫と呼ばれる人がいると聞いてきた!。誰かい
ないか!？」

(これなら内部隅々まで行き届いただろう)

永遠亭から誰かでてくるまで待つ。しかし5分ほど経っても誰も出てこないどころか返事もない。おかしいなああの声で聞こえなかったのか？

(もう1回呼んでみよう)

大きな声を出すために息を吸い込む。そのとき永遠亭から声が聞こえた。

「はい！はい！はい！今出ます〜！！！」

そんな声と共に戸が開く。

「この家、広すぎるのよね・・・どちら様ですか？」

永遠亭の広さに愚痴りながら誰かが出てくる。そしてその人は俺の顔を見ると驚いてこう言った。

「って流斗さん！？」

それは幻想郷に来て始めて会った、ウサギの耳を付けたかわいい少女、鈴仙だった。

第5話　～再会～（後書き）

どうだったでしょうか？

次はいよいよ紫が永遠亭に行けといった理由を明かします。

展開に「え〜」と思う方がいるかもしれませんが。

ですがそこを納得していただけたら幸いです。

さてこれから少し流斗についての質問があったのでお答えしたいと思います。

とりあえず本人を呼んでおきました。

流斗「どうも、流斗だ」

作者「それじゃあ早速答えたいと思います。質問の内容は流斗の『流れを操る程度の能力』でどんなことが出来るのか、という質問です。じゃあ流斗、教えてくれ」

流斗「そうだな、流れに係わることなら、形がある物にしらない物にしる大体のことはできるな。前者だと弾幕をそらしたり、川の水とかを操ったり、人の体を操ったりもできる。まあ簡単に言うとなんか物なら大体操れる。後者は時を操るのが主流だな。咲夜が出来ることは空間関係以外なら全部できる。操れる時間は咲夜より短いかな。他にも話の流れを操って話題を変えるとかある。他にも年齢を操って老いを止めるって具合な事も出来る。だが老いの流れを戻したりはさすがにできないな。時間にしてもそうだが止めることはまだしも戻すのはかなりの霊力と妖力を取られる。今の俺じゃあできない」

作者「そのことをふまえても結構チートだな・・・」

流斗「それでもねえぞ？流れを操る為に流れを感じなきゃいけないんだ。これがなかなか難しいんだよ。目で感じられる様な流れならいいんだが、時間とか形が無い物になると感じにくくて発動が遅いんだよ。だから戦闘では癒紅の結界とかで補助してもらいながらじゃねえと役にたたん」

作者「意外な欠点だな」

流斗「まあどんな能力も万能じゃあねえってことだよ」

作者「そうだな」

流斗「じゃあ俺はこれくらいで帰るぞ？早く帰らねえと癒紅が心配する」

作者「ああ、ありがとう。それじゃ」

流斗「またな」

流斗の能力に関してはこんな感じですよ。その他にも【こんなことできるの？】みたいな質問があれば個人的にお返しいと思います。感想とか誤字の報告とかも待ってるのでよろしくお願いします。

第6話　〜本当の實力〜（前書き）

昨日は更新できなくてすみませんでした・・・
進路の関係でごちゃごちゃあつて書けませんでした・・・

今回は永遠亭で戦闘です

戦闘描写は書いたことないけどがんばって書いてみました
それではどうぞ！

第6話　〜本当の実力〜

「よく俺だっつてわかったな？髪の色とか変わってるのに」

俺は妹紅はわからなかったのに鈴仙がわかったことが気になり聞いてみた。

「まあ始めの出会い方が普通じゃありませんでしたし・・・それに・・・／／／」

「それにつてなんだ？あとなんで顔が赤くなってるんだ？」

まだ続きがあるようだったのでつなげて聞いてみる？

「いえ！！なんでもないです！気にしないでください！！／／／」

顔を真っ赤にしてそういう鈴仙。なんで顔が赤くなってるんだ？・・・まあいいか。

「ところでそこにいる子は誰ですか？それにこんな所まで来てどうしたんですか？何回か里に薬を売りにいった時も人里にいませんでしたし私心配してたんですよ？」

落ち着いてきた鈴仙が俺の隣にいる癒紅を指差しながら聞いてくる。

鈴仙はこの1年間会えなかったことで心配だったみたいだな。ちょっとどいいし話しておくか。

「実はな・・・」

少年説明中

「それで一緒に修行してたのがこの癒紅だ」

「癒紅です。よろしくです」

「こちらこそよろしく。でもそうだったんですか・・・だから人里に行ってもいなかったんですね。妖怪とかにおそわれてなくてよかったです。それでここに来た理由はなんですか？」

説明し終わると鈴仙は癒紅に挨拶したあと俺の話で納得がいったらしく、始めの疑問を聞いてくる。

「ちょっと俺の友人に腕試しがしたいといったらここにいる姫に合ってみるといわれて来たんだ。すまないが姫と言っ奴に会わせてくれないか？」

俺は簡単にここに来た理由を説明し、会わせてもらえるか聞いてみる。

「姫様ですか？ん・・・じゃあ姫様に会われるか聞いてみるので少し待っていてください。」

少し考えたあと、そういつて鈴仙は永遠亭の中に戻っていった。

「姫ってどんな人なんでしょうね？」

待っている間は暇らしく癒紅が話しかけてきた。

「さあ？会ってみないとわからんな。だが仮にも姫って呼ばれてるんだ、お上品な感じの人なんじゃないか？」

「・・・見惚れちゃダメですよ？」

頬を膨らましながら言ってくる癒紅。なんで癒紅がそんなこと言うてくるんだ？・・・まあいいか。適当に返しておこう。

「大丈夫だって。女は外見じゃねえからな」

「じゃあ・・・どんな人がいいですか？」

興味津々といった感じで聞いてくる。癒紅もそんなこんな所は女の子だな。

「一緒にいて楽しい人」

「楽しい、ですか・・・それならこれからは・・・ぶつぶつ・・・いやでも・・・ありのままの自分じゃないと・・・ぶつぶつ・・・」

なにか一人で考え始めたな・・・なんか怖いしこのまま放っておこう。

そんな事を考えていると永遠亭から鈴仙が戻ってきたみたいだ。

「お待たせしました。姫は会われるそうですよ。それじゃあ入って私に付いて来てください」

そう言っただ中に入っていく鈴仙。俺はまだぶつぶつ言っていた癒紅に声をかけ、一緒に鈴仙に付いていった。

少年・少女移動中

中はでかかったがさして変わった物もない武家屋敷だった。ウサギが異常に多かったのが気になったがそこは個人の趣味かもしれないから黙ってしよう。

「ここが姫様の部屋です、姫様は中で待たれていると思うのでどうぞ」

少し歩いてからでかい部屋の戸の前まできた鈴仙はそう言った。

「じゃあ遠慮なく」

「失礼します」

戸を開け中に入っていく俺と癒紅。

その中にいたのは絶世の美少女とも言える長く綺麗な黒髪を腰まで伸ばした少女だった。

「あんたが姫っていうひとか？」

「そうよ。私の名前は蓬萊山ほうらいざん 輝夜かぐや。この永遠亭の主よ。輝夜と呼

んでいいわよ」

「俺は流斗、こっちは癒紅。早速ここにきた用事を言おう。俺は腕試しがしたいんだが俺の友人が輝夜に聞けばわかるかというって訪ねてきた。心当たりはあるか？」

八雲はここにくればわかると言っただけで詳しくは何も聞いていない。だから輝夜に心あたりがないか聞いてみる。

「ああ、そういうことね。鈴仙、永琳を呼んできて」

「わかりました」

なにか心あたりがあったようで鈴仙に永琳という人を連れてこさせるみたいだ。これでやっと腕試しができるな。

「おっと、そう言えば忘れていた。輝夜すまないがそっちで長い棒を用意してもらえないか？今日は殺し合いに来た訳じゃないから俺の武器は持ってきてないんだ」

「それは別にかまわないけどただの棒で腕試しできるの？」

さすがに不思議だったらしく俺に聞いてくる輝夜。それを隣にいる癒紅が俺の代わりに言う。

「私の能力があれば大丈夫ですよ」

「あなたの能力で？・・・まあそれができるなら別に私はかまわないわ」

始めは疑問そうな顔をしていた輝夜だが興味を失ったらしく深くわ聞いてこなかった。

こんなやりとりをしていると鈴仙が帰ってきた。

「師匠を連れてきました」

「お呼びですか、姫？」

そんな言葉と共に鈴仙の後ろから人がでてきた。その人は赤と青のツープラトンの服を着た銀髪の女性だった。

「すこしこの人と手合わせして欲しいのよ」

「・・・また暇つぶしですか？」

「そんなところよ。手を抜いちゃだめよ？手抜きの手合なんておもしろくないんだから」

笑みを浮かべながら女性に忠告する輝夜。

「はぁ・・・わかりました」

あきれた感じでした承する女性。その様子を一部始終みていた俺と癒紅は同じ感想を抱いた。

（この人も大変そうだな・・・）

そんな事をおもっていると女性はこちらに向き直って俺に話しかけてきた。

「こんにちわ。今日あなたの相手をさせてもらう八意 永琳です。
永琳とよんでください。今回、手加減できませんけど許してください
い」

「俺は流斗だ。こっちは癒紅。手加減なんてされちゃ腕試しの意味
がなくなるからいらないさ。それで永琳は強いのか？」

俺は自己紹介をした後聞いてみる。幽香より弱かったら腕試しの意
味がないからな。

「それはあなたの目で確かめてみたらいかが？」

「望むところだ」

微笑しながら言ってくる永琳の言葉を真っ正面から受け止める。上
等だ。

「それと俺は弾幕ごっこはあんまり得意じゃないんだ。だから普通
に戦ってくれるとありがたい」

今回は俺の腕試しだけが目的だから弾幕ごっこでなくていいだろう。
弾幕ごっこだと確実にまけそうだしな・・・

「それでいいですよ、それではここで戦闘はしたくないので外にで
ましようか」

そう言っつて俺、癒紅、輝夜、永琳、鈴仙は一緒に外にでていった。

少年・少女移動中

俺たちは武家屋敷から少し離れた開けた場所に来た。永琳はもう準備ができているらしく弓を持って開けた場所に立っていた。

そんななか俺は腕試しの件を輝夜に言ったときに頼んでいた棒をもらって癒紅のところに行った。

「ゆあ、すまないが頼む」

「了解です!!」

俺はそう言いながら癒紅に俺の首ぐらいまである棒を渡した。なぜ癒紅に棒を渡したかというところの棒に加護をつけてもらう為だ。いかにこれがただの腕試しといえど相手も本気でくる。そんな勝負にただの棒ではいささか頼りない。だから癒紅に能力で加護を付与してもらい壊れないようにしてもらおうと思ったわけだ。

「できました!この棒に『不滅の加護』を付与しておきました。これでどんな衝撃が来ても大丈夫ですよ!」

「ありがとう、癒紅。じゃあ行ってくる」

「はい!がんばってください!!」

癒紅に尻目に永琳の前に向かっていく俺。

「戦闘時間は10分。相手の武器が自分に1回でもあたるか、時間が来たら終了。ただし私は遠距離武器だから3発、あなたは急所の

み有効。能力使用は相手に干渉しなければあり。エリアはこの開けた場所のみ。このルールでいいかしら？」

「ああ」

簡潔にルールを説明しこれでいいか聞いてくる永琳。その問いに俺は簡潔に答えた。

そして鈴仙が俺たちの間に来た。

「それでは一本勝負・・・はじめてください！！」

その言葉を合図に俺は永琳に向かって走っていった！

俺と永琳の間は10メートル程度。妖怪化した俺の身体能力ならこんな距離瞬きする間に詰められる。

だがその瞬きする間に永琳は俺にむかって矢を放っていた。

「っち！！」

俺は舌打ちしながら走りながら持っていた棒で矢を払い落とす。

だが払ったはずなのに同じ方向から俺の体に衝撃が走った！！

永琳は瞬きする間に矢を2本放っていたのだ。しかも俺に見えない様にするために始めに放った矢と完全に同じ軌道で！！

(くそ！！避けていけば！！あと2発！！)

心でごちりカウントダウンしながらも相手に向かって走る。相手は弓。距離を離されたら不利だからだ。

だが永琳もそれを黙って見過ごすはずもない。すでに弓を構えており第2陣を放ってくる。

今度は同時に横に3本放ってきた。

今度は槍の流れを瞬時に感じ取り、全てかわす。

それと同時に俺の流れを操り加速させる。これで俺の早さはさっきの2倍。

(これで一気に勝負を決める!!)

そう思って永琳の懐に入り永琳の脇を下から上へ突き上げる様にしてねらう!

だが永琳は早くなった俺の早さに対応して俺の攻撃を急所の脇ではなく腹でうける。

当然、永琳は空中に吹っ飛び、俺は追撃するために永琳に向かって早さを維持したまま飛ぶ!

だがまた俺の進行を止められた。

なんと永琳は空中に吹っ飛びながらも俺にむかって矢を放ってきたのだ!!

(あの体勢で打てるか!? 普通!! あと1発!!)

俺はあまりに予想外な事に驚きながらも着地した永琳に向かって走っていった。

（これは使いたくねえがもう後がねえ！！やるしかない！！）

そういつて俺は持っていた棒を逆さに持ち替え能力を発動する。

そして永琳に向かって走っていた力を利用して空中に高くジャンプし槍をふりかぶる。

そんな俺に永琳は矢を放ってくる。俺は完全に空中で無防備状態そんな俺を見逃すはずはないだろう。

だがそんなものはお構いなしに俺は持っていた棒を永琳に向かって投げた！

棒はものすごい早さで永琳に向かって飛んでいったが永琳には軌道が見えているらしくかわそうとしている。

（かかった！！）

俺は心で素晴らしい能力を発動した！！

そして永琳は自分にむかって飛んでくる槍の軌道を見切ってかわした・・・様に見えた。

俺かわしたはずの投げた棒は永琳のみぞおちに綺麗に入っていた。

永琳は確かに俺の投げた棒の軌道を完全に見切っていた。だが俺が

能力を発動して槍の流れを『永琳の急所に当たる流れ』に書き換えたのだ。だから永琳がいくらかわそうとしてもかわせない。

しかしこの技の欠点、それは槍を受けれる相手だと全く効果がないのだ。

今回の様に相手がかわそうとすれば相手には必ずあたる。だが俺の投げた全力の槍をつかんだりされたら槍の流れもくそもない。実際に幽香には槍をつかまれ破られてしまった。

今回の永琳は弓の使い手だったが俺の動きを見切っていたことから身体能力もかなり高いだろう。それでもし幽香の時のようにつかまればなら終わりだ。

これが俺がこの技を使いたくない理由だ。

俺は起きあがっていた永琳に向かって歩いていった。

「私の負けね」

すこし残念そうにそういつてくる永琳。

だがこの勝負は永琳の負けじゃない。

「いや、俺の負けだ」

「え？でもあなたの攻撃は私の急所にあたったじゃない」

「その前に永琳の矢が俺に当たってたんだ。だから俺の負けだ」

棒を投げる時に永琳が放った矢が棒を投げた後にちゃんと俺に当たっていた。

「そう。それじゃあ引き分けてことにおきましよう」

「いいのか？」

本当は俺の負けなのに引き分けにするという永琳。

「いいのよ。元々私は勝ち負けにこだわってなかったから」

「そうか。じゃあ引き分けて事でよろしく」

「ええ、了解よ」

そういつて笑い会う俺たち。そんな俺には癒紅が、永琳には輝夜、鈴仙が近づいてくる。

「すごかったです師匠！流斗さん！お二人ともお疲れさまでした！」

「なかなか楽しかったわ永琳、流斗」

「お疲れさまです、流斗さん、永琳さん」

俺たちをねぎらってくれる鈴仙、輝夜、癒紅。

「3人ともありがとうな」

「ありがとう」

3人に例をいう俺と永琳。

「それじゃあ用も済んだ事だし俺たちは帰るか」

「そうですね、神社に帰りましょう」

帰ろうと言い合う俺たちに輝夜がこんなことを言ってきた。

「流斗、あなた気に入ったから暇になったらまたきなさい。今度は私とお酒でも飲みましょう」

「それもいいかもな。じゃあ暇になったらまた来る」

輝夜に了承した旨を伝えた。

「流斗さん、また会いましょうね」

「怪我をしたら永遠亭にすれば直してあげるわ」

別れ際にそう言ってくる鈴仙と永琳。

そして3人に手をふりながら俺たちは神社に帰っていった。

「そういえば、流斗さん？今回で自分の実力わかったんですか？」

帰り道に癒紅が今回永遠亭にいった理由になった目的がどうだった

か聞いてくる。

「そのことで気づいたことがあるんだ」

「それってなんですか」

俺が今回の永琳との勝負で気づいたこと。幻想郷最強と名高い幽香と戦っても気づかなかったこと。

「それはな、実力は持っている力だけじゃ決まらないってことだ。俺は幽香と戦っても悪くても引き分けにはできる。だが今回の永琳との戦いは良くて引き分けだった。要するに実力は相手にたいする有効な戦い方しだいでいくらでも変わるって事だよ」

「じゃあこれからは戦い方も学ばなくちゃいけませんね」

「そうだな。まあこの幻想郷にいるかぎりそんな機会はごまんとある。気長にやっつけていこうぜ」

「はい!」

これからも学ぶことはあることを再認識しながら俺たちは神社へと帰っていった。

第6話 〽本当の実力〽（後書き）

わかる方はわかるかもしれませんが流斗が使った技は某運命の名のつくアニメにでてるクーリーリの技です。

今回は長くなってしまいました。文章が甘くなってるかもしれないのでご指摘や誤字などの報告待ってます。あと感想もよろしければお願いします。

番外編1話 〽突撃してきた少女〽 (前書き)

今回は流斗が修行しているときに起こった出来事です。

番外編1話 〱突撃してきた少女〱

癒紅がこの神社にきて一緒に修行を始めてから1週間たった。

癒紅は自由時間以外は大体俺と同じ事をして過ごしている。ちなみに自由時間はもっぱら寝ている。まだ生まれてまもない妖怪だから体が睡眠を欲しているのか？

まあそんなことで癒紅も神社の生活に慣れてきたみたいだ。今は霊夢に幻想郷について教えてもらっていることだろう。

かくいう俺は幻想郷についてはこの神社に住み始めて1週間くらいで覚えた終わった。癒紅もそろそろ終わるだろう。だから今は身体強化の修行をやっている。これで午前、午後で同じくらい修行できるから上達も早くなるはずだ。

(そろそろ時間だな。終わりにするか)

この1週間のことを考えていると時間がくる。

そして午前の身体強化の修行を終え、神社に帰ろうとする。

だが俺は奇妙な音が聞こえたのでその場に立ち止まった。

「なんだこの音は？」

耳を良く澄まして聞いてみる。

(た……け……れえ……?)

とぎれとぎれでうまく聞こえない。もつと耳をすまして聞いて見ると音はどんどん大きくなってきた。

「た——す——け——て——く——れえ——!!」

はっきり聞こえた!!なんだ!?!どこにいるんだ!?!

そういつて回りを見てみるが誰もいない。

「どこにいるんだ——!?!」

俺は大きな声を出して聞いてみる。

「ここだ——!?!」

俺はなぜかこの瞬間にいやな汗が背中を伝う。

(なにかわからないがとてつもなくいやな予感がするぞ!!)

そんな予感が的中するかの様にいきなり俺の背中にバイクでもぶつかったかのような衝撃が走った!!

俺はいきなりの衝撃に驚きながら吹き飛ばされる!そして地面を転がっていく。

さいわい最近、妖怪化が進んでいたから普通の人間が卒倒するような衝撃でもせいぜい階段から落ちたぐらいの痛みですんだ。

俺は起きあがりながら俺に突撃してきた物体がなんなのか確認するために俺がいた場所を見た。

そこには、魔法使いのような服装をした金髪の少女が目をぐるぐるさせながら倒れていた。

（なぜ少女であんな衝撃がでるんだ？）

そんなことを思いながらもこのままにはしてられないので少女を抱え博麗神社に入ってしまった。

side 魔理沙

私は、最近ずっと魔法の森で見つけた新種のキノコを見つけてそれを研究していた。でさつきそれも終わって今は博麗神社に向かっているところだ。ずっと家に引きこもってたからなあ。霊夢もさびしがっていることだろう。

できるだけ早く行こうと乗っているほうきのスピードを上げる。風がきもちいいぜ！

風の気持ちよさを感じながらそろそろ博麗神社の近くまでやってきたのでほうきのスピードを下げようとする。

（あれ？・・・スピードが下がらない！！）

いくら下げようとしてもいっこうにほうきのスピードは下がらない

「！！これはやばいぜ！！」

「誰かー！！たすけてくれえ！！」

私は危険を感じて少女にあるまじき大声を出す！

「たー！ーすー！ー！ーけー！ー！ーてー！ー！ーくー！ー！ーれえー！ー！ー！！」

このハイスピードで飛んでいるほうきに乗っている私を助けられるはずはないとわかっていても大声をだす！しかしそんな期待を嬉しい意味で裏切ってくれるようにかすかに声が聞こえた！

「ど………に………んだー！ー！？」

「ここだー！ー！！」

そんな助けの声に私は返事を返しながら声が聞こえた方へ飛んでいく！！その声はは計ったように博麗神社から聞こえてきた。

博麗神社に人影が見えた。私はそれがさつき声をだしてくれた奴だと思った。そして私はそいつが助けてくれる事を願いつつそいつに突撃していった。

だが私はそいつが私の方とは違う方角を向いていたのを見て冷や汗をかいた。

だがもう軌道を変えることもできず、私はその人にぶつかって意識を落としていった……

少女気絶中

「……ん、ここは……博麗神社か？」

どうやら私はあれから気絶して誰かに運ばれたみたいだ。

「お！やつと目が覚めたか」

今の自分の状況を確認しているとすぐ横から声が聞こえた。私はその声が聞こえた方を向く。

そこにいたのは背のそこそこ高い髪がつんつんした男だった。

side 魔理沙 out

俺がこの少女を運んで30分。俺の背中痛みはもう消えていた。さすが妖怪ボデイ。未完成とはいえこの回復力には目を見張るものがあるな。

そんなことを考えていると隣に寝かせている突撃してきた少女が目を覚ました。

「……ん、ここは……博麗神社か？」

どうやら博麗神社に来たことがあるみたいだな。なら霊夢のお客さんだな。とりあえず声をかけておくか。

「お！やつと目が覚めたか」

「もしかして私がぶつかったのはお前か？」

ぶつかった時、俺はこの少女に対して後ろむいてたから顔がわからなかったのか。

「そうだぜ。かなりの衝撃だったんだがなんだったんだ？」

「ああ、ちょっとほろきの扱いをまちがえちまってスピードが落ちなかったんだ。ぶつかって悪かった、・・・えっと」

「流斗だ」

「私の名前は霧雨きりふゆ 魔理沙まじだ。ぶつかって悪かった。それとよろしく、リュウ」

俺たちは軽く挨拶し合った。

「それで霧雨「魔理沙って呼んでくれ」・・・魔理沙は霊夢に用があつてきたんだろ？」

「まあ、用ってほどじゃないんだが会いにきたのは確かだぜ」

「じゃあ霊夢はたぶん居間にいるからいこうぜ」

「わかったぜ」

俺たちは霊夢と癒紅がいる居間に向かっていった。

少年・少女移動中

「霊夢、お客さんだ」

癒紅と一緒にいた霊夢にお客さんが来たと言っておく。

「よっ！久しぶりだぜ」

「魔理沙じゃない。ここの所見なかったからまたキノコの研究でもしてたの？」

魔理沙とは結構仲が良いらしく気軽に話し合っていていく霊夢。

「霊夢、それでこのリュウとその子は誰なんだ？」

「ああ流斗と癒紅は外界からこつちに来たのよ。それで今は少し紫から頼まれてここにすませながら修行させてるところなのよ」

「よろしくです、魔理沙さん」

霊夢が簡単に俺たちの説明を終えた後癒紅は魔理沙に挨拶する。あとは俺が少し付け加えておくか。

「俺と癒紅は妖怪なんだ。っていつても俺は元人間でまだ完全な妖怪じゃないがな。で癒紅は外の世界からこつちに逃げてきて、俺は紫に頼まれてこつちきた。今は俺の妖怪化が終わるまでの間、癒紅と力を完全に使いこなす為に修行してるんだ」

「へ〜そうだったのか」

俺の説明をきいた魔理沙はそんな事を言うとか何か思いついたらしい。

「リュウ、その修行手伝えることないか？」

顔をキラキラさせながら言うってくる魔理沙。ん〜そうだな。

「夕方の霊夢との模擬戦なら手伝えるんじゃないか？」

「なら私もその修行参加していいか？」

それはいい提案だな。霊夢はおもしろ半分で俺をボコボコにするからな。それを免れるなら賛成だ。

「ああ、いいぜ。こっちとしても助かるしな」

「そうか！じゃあこれからよろしくな、リュウ」

「おう！よろしく」

そうやってお互い熱く握手をした。だが俺は握手を終えた後に魔理沙が紫の様な邪悪な笑みを浮かべていたのを見逃していたんだ。

そして俺はこの後この決断をひどく後悔したのだった。

番外編1話 〈突撃してきた少女〉（後書き）

今回は魔理沙との出会いを書きました。

魔理沙はもつと男みたいな感じだとおもったけどうまく書けなかったな・・・

ここで一つお知らせがあります。

実は作者は今年就職試験が控えている受験生です。

よってこれから忙しくなるので1日1更新が出来なくなるかもしれません。

でもできるだけがんばってみるので暖かい目で見て頂けたら幸いです。

それではまたいつかノシ

第7話 香霖堂（前書き）

どうも、作者のぜんそく持ちです。

就職活動の合間を縫ってやっとかけれました。

なかなか更新できなくてすみませんがまだ内定が決まっていないので次の更新も遅くなりそうです。

へたれな作者ですみませんがどうかお許しを。

それではどうぞ

第7話 香霖堂

「癒紅、一緒に香霖堂つてところに行かないか？」

修行が終わってから毎日暇をもてあましている俺は外の世界のものが売ってあるという香霖堂に行こうと思った。

今は一人で行くのは少し寂しいので癒紅を誘っているところだ。

「それって霊夢さんから聞いた道具屋ですか・・・いいですね。私も外の世界の物にも興味がありましたから行きましょう」

そうか、癒紅はずっと人間から逃げるように生活していたから外の物は見たことがあまりないんだな。

「よし！じゃあ早速行くか！」

「はい！行きましょう」

俺たちはそうやってすこしわくわくしながら一緒に香霖堂を目指して飛んでいった。

少年・少女移動中

「ここが香霖堂か・・・」

「何か怪しい物がいっぱいありますね・・・」

香霖堂について始めて目に入った物は道路の標識だった。なぜこんな物が・・・

「とりあえず中に入ろう」

「そうですね。中にはまともな物があるかもしれせんし」

店の前にあった道路の標識に度肝を抜かれた俺たちは中にまともな物があることを祈りながら香霖堂に入った。

「いつらっしやい。品物は手に持ってもらってかまわないよ。買いたい物があつたら僕の所にもってきてくれ」

店に入ってすぐに店番をしているらしい白髪の男にそんなことを言われた。

「店の人はまともそうでよかつたな」

「そうですね。あんな物があるくらいだからどんな人かと思つてたけど普通な感じのひとでよかつたです」

「ん？何か用かな？僕の顔をじろじろみて」

店番の男をみながら癒紅とひそひそ話をしていると視線に気がついた男が話しかけてきた。

「いや！なんでもない！！な？癒紅？」

「はい！なんでもないです！」

「それならいいんだが・・・品物は見ないのかな？」

いつまでも入った位置から動いてないことを不思議に思ったのかそんな事をいつてくる

「それじゃあ少し聞きたいんだが、外の世界から来た物を見せてもらえないか？」

「それならその机においてある物がそうだよ。だがあいにく使い方はわからないんだ・・・」

使い方がわからないことが残念なのか少し落胆しながら言うてくる男

「それなら俺がわかるものだけだが使い方を教えてやるつか？俺は外の世界から来たんでね」

「いいのかい！？」

座っていたいすが後ろに倒れるほどの勢いで立つ男。そんなにうれしいのか。

「どうせ暇だしな。癒紅、ちょっと時間かかるけどいいか？」

「いいですよ。私はいろいろ見えますから」

「悪いな。できるだけはやく終わらせるよ」

癒紅に確認をとってから俺は顔をキラキラさせながら説明を待っている男に使い方を説明し始めた。

少年説明中

「……とまあ俺がしてるのはこれくらいだな」

「電気というものがなければ動かない物が多かったけど収穫はあったよ。ありがとう」

あれから1時間程度男に説明していたが、あつたものはほとんどが電化製品だった。電気がないこの幻想郷ではこんなものは役に立たないと男に言ったが男は俺の説明を熱心に聞いてくれてよかった。

「そう言えばまだ名前を言ってなかったね。僕はこの香霖堂の店主をしているもりちがりのすけ森近 霖之助だ。今後ともごひいきに」

「俺は外来人の流斗。あつちで品物見てるのは妖怪の癒紅だ」

簡単に自己紹介をかわしたあと俺は品物を見る事を霖之助に告げ品物を見ていった。

(やはりあまりめずらしい物はないな……ん?)

ふと目に付いたのはピンク色をしたバラの髪飾り。

(今日は癒紅に暇な思いさせたからな……プレゼントしよう)

それを手に取りまた品物を見始めた俺は気になる物を見つけた。それは古びた銀色の懐中時計だった。

(懐中時計が妖力をまとっている・・・それにもしかしたらこれを使えば・・・)

俺はこの時計を使えばあることが素早く出来るようになるかと思
いその時計も手に取り霖之助の元に向かった。

「霖之助、これとこれが欲しいんだがいくらだ？」

「今日は君にいろいろ教えてもらったからね、それは無料でゆずるよ」

教えたことになんか感謝しているらしく笑顔でそんなことを言う霖之助。

「そうか。ありがとう」

「いやいや、こちらこそ」

お互いにお礼を言い合って髪飾りと懐中時計をもって癒紅の所にいく。

「癒紅、なにか気になるものはあったか？」

「はい！いっぱい不思議なものが見れてたのしかったです!!」

満面の笑みでそう言う癒紅を見ながら俺は癒紅にさっきかった髪飾りを渡した。

「今日は暇な思いさせちゃったからこれは埋め合わせだ」

「わあ〜綺麗です。ありがとうございます！流斗さん」

これまたうれしそうな顔をしながら抱きついてくる癒紅。

「よろこんでくれて嬉しいよ。それじゃあ帰るか」

「はい!」

俺たちは霖之助に別れをつけ店から出た。でた瞬間に標識があることを忘れており少しびっくりしたことは内緒だ。

早速プレゼントを髪につけた癒紅と一緒に俺は博麗神社に帰っていた。

帰ったらこの懐中時計についていろいろかんがえてみるかな。

第7話 香霖堂（後書き）

咲夜のぱくりと思われるかもしれませんが懐中時計を出しました。
まだこれについては考えていることがあって次のお話で明かそうと
おもっているので楽しみに。

感想、誤字報告等待ってます。

お知らせ

どうも、作者のぜんそく持ちです。

前回の更新から約3週間ほど経ちましてやっと就職活動も一段落しました。

ですので更新を再開したいと思います！！

今まで長らく更新できなくてもうしわけありませんでした・・・

ですが就職活動の事ばかり考えていたので小説のネタが全て頭から吹っ飛んでしまいました・・・

ですので更新は今週の土曜か日曜日にでもしたいと思います。

今まで「更新はまだか!？」や「早く更新しろ!」などのことを考えていた方々、申し訳ありませんがもう少しお待ちくださると助かります。

長く更新してなくてこんなことを言うのは凶々しいと思われる方もいらっしやるでしょうが、これからも《適当な現代人が幻想入り》をよろしくお願いします。

第8話 新たな出会い

「俺の考え通りならこれであれができるはず」

俺は香霖堂から博麗神社に帰ってきた後、購入した懐中時計で俺の考えていた事を試そうとしている。

「さっそくやってみるか」

そう言いながら懐中時計を開けようとする俺。

(ん？開かないな・・・)

開けようとしても開かない懐中時計。壊れてんのかな？

そんなことを考えているといきなり声が聞こえた。

「勝手にわしを使おうとするとは何者じゃ！？」

は？使う？何の事だ？

「この声どこから聞こえてんだ？」

「ごうじゃ！お主がもっておるじゃー！！」

「まさかこの懐中時計だとかほざきやがるんじゃないだろうな？」

そんな妄言を信じるほど俺はまだこの幻想郷に染まってないんだよ。

「むむ、信じておらん！ならば！！」

謎の声がそんなことを言うと言っていた懐中時計がいきなり中に浮き俺から少し離れたあとボン！という効果音とともに綺麗な黒髪の女性が出てきた。

「これなら信じずにはおれんじやろうが！！」

「まあ目の前でそんなの見せられちゃな」

さすがに目の前で変身？まがいの物を見せられたら信じるしかないだろう。

「でお前は？時計の悪霊？」

「悪霊ではないわ！！わしはこの時計の九十九神じゃ！」

九十九神か・・・たしかにそれなら幻想郷にあるのもうなずけるな。

「まあそんなことはどうでもいいや。とにかく俺はお前を使ってやりたいことがあるんだ。使わせてくれ」

「いやじゃ。わしはわしが認めた者が気に入った者以外にこの身を使わせる気は無い！」

「それじゃあどうしたら認める、もしくは気に入ってくれるんだ？」

とにかく俺が考えていることをやるにはこいつを使わなくちゃいけないからな。

「そうじゃの〜。認める方は時間に関するなんらかの力があれば良い。気に入る方はわしの気まぐれじゃ」

お！この条件なら認める方がクリアできるな。

「じゃあ認める方の条件をクリアしてるから使わせてくれ」

「主はアホか！わしにみせてもおらんに使わせるとは順序が逆じゃろうが！！」

しまった・・・俺としたことが早く考えていたことを試したいからと焦りすぎた。

「悪かったな。今見せてやるよ」

んじゃま、周りの時の流れを感じてっと・・・おし、これでどうだ。

時間を止めて黒髪の女性の背後にまわる。

そして時間を元に戻そうとした時。

「うむ、確かに時間を操る能力があるようじゃの」

目の前が女性がしゃべり出した。

「うお！なんでお前しゃべれるんの！？」

「かりにも時計の九十九神じゃぞ？時間に関係する能力はわしにはきかん」

おいおい。いくら時計だからってこれはチートだろ。

そういつて目の前の女性のでたらめさにあきれながら俺は時を戻した。

「それにしても時を止めれるとはな。主はなかなか強力な能力をもっているな よし今から主はこの身の主だ！よろしく頼むぞ！えつと・・・」

「俺の名前は高峯流斗だ。お前の名前は？」

「わしは名前をもっていないんじゃない。じゃから主が決めてくれ」

いきなり名前を決めろつたって・・・んぐ。

「じゃあ時計にちなんでト・ケイってのは？」

「主はふざけておるのか！？ちなむのではなくそのままではないか
！！」

「悪い悪いw冗談だ」

そう言えばこの女性、見た目が和服で黒髪。まんま日本人みたいだな。それなら・・・

「今度はホントに時計にちなんで京けいつてのはどうだ？」

「うむ！その響きは気に入ったのじゃ！それではこれからよろしくの、流斗」

「おう、よろしく京」

俺たちはそんなことを言いながら握手をした。

第8話 く新たな出会い（後書き）

久しぶりの更新は時計の九十九神、京との出会いでした。

今回はなにぶん久しぶりの投稿なので書き方が変わってしまっているかもしれませんが。その辺はなにぶんご容赦を・・・

そして今回は少し読者の方々に聞きたい事があります。

皆様はバカとテストと召喚獣という作品を知っていますか？

実は作者は今その小説を読んでいてふと『流斗がこの作品にはいつたらそうなるんだろう？』という考えが出てきて無性に書きたくなっていました・・・

そこで読者の皆様にアンケートをとって頂きたいと思います。

選択肢は

- 1、やっちなまえ（キョン風に）
- 2、今の小説もまともに書いてないのにふざけるな！
- 3、それより他の作品を！！

この3つです。

もし3つ目の意見がありましたらやっちなまえ欲しい作品名も一緒に書いて欲しいです。

でも作者が知らないアニメなどだったら難しいのでかんがえさせて
いただきます。

締め切りは来週の金曜とさせていただきます。

選択しにあるように今の作品をまともに書き上げていないのでまこ
とに恐縮ですがよろしくおねがいます!!

オリキャラ設定(前書き)

体育祭や文化祭でモチベーションが上がらずに書けませんでした・・・
すみませんでした

オリキャラ設定

名前 京^{けい}

種族 九十九神

能力 ?

容姿 髪は黒髪のロング

目は黒ですこしつり目

見た感じは大和撫子のような美人

身長170cm

体重60kg

服装 常時和服の状態

洗濯などは一度時計の姿に戻ればきれいになる

性格 いつもえらそうにしているが実は結構面倒見がいい

癒紅とはかなり仲がよく妹のように思っている

流斗に対しては気心の知れた友達のように思っている

だがちゃんと主としても認めている

備考 京の姿には人型、時計型、人型と時計にわかれる別離型の3種類がある

別離型の時に時計を破壊されてしまうと人型も消え死んでしまう
時計型の姿の京を流斗が身につけると時間の流れを感じる事ができる

これによって流斗は時間操作を今までの比ではないほどの早さで実行できるようになった

だがあくまで時計型を身につけているときのみ有効
京単体の戦闘能力は人並み程度

オリキャラ設定（後書き）

今回は簡単な京の設定です。
結構抜けているところがあつたりこれから付け加えていったりする
かもしれません。

ところで皆様は前回、作者したアンケートを覚えていらっしやるで
しょうか？

締め切りがすぎても一票も集まらなかったのもう1度アンケート
をしたいとおもいます。

お題は「バカとテストと召喚獣の二次創作を書くことについて」で
す。

選択肢は

- 1、神は言っている、やるべきだと
- 2、新作ダメ、絶対！
- 3、そんなものに興味はない！違うのをやれ！

以上の3つです。

3を選んでくれた方はやって欲しい作品と一緒に書いてください。

締め切りは今週の金曜日までとさせていただきます。

沢山の人に答えて頂きたいと思っております。

たびたび皆様にアンケートをして迷惑をかけておりますがよろしく
お願い致します。

PS・次話は明日にでも書こうと思えます。更新が不安定な作者で

はありますが何卒よろしくお願い致します。

第9話 ～これからのこと～

「そういえば霊夢、修行も終わったし俺たちはどこに住めばいいんだ？」

あのあと癒紅と霊夢に京の事を報告し縁側で霊夢とのんびりしているとふとそんなことを思い出した。

ちなみに癒紅と京は今でお休み中だ。京は癒紅の事が気に入ったらしく癒紅を抱き枕の様にして眠っている。その様はまるで姉妹でも見ているかの様だった。

「別にここに住んでもいいわよ？あんた達は家事も手伝ってくれるし」

「ならまだしばらくはここに住まわせてもらおうよ」

霊夢は当然のことの様にそう言った。

まあ住むところもまだ決めてないしありがたい提案だったので受ける事にした。

「それにしてもまさか買った物が九十九神だったなんてな。びっくりしたよ」

霖之助はなにも言わなかったからてっきり古いだけの時計だと思っていたのに。

「それはもうけものだと思えばいいじゃない。リュウも京のおかげ

で出来るようになったこともあるんでしょ？」

そうなのだ。俺は京のおかげで出来る様になったのはさんざん引張ってきたが時間操作を短縮することだ。当初は時計の針を見れば時間の流れを視覚としてとらえられて少しでも能力の発動の時間を短縮使用と考えていた。だが京は時計の九十九神だけあり時間を体の一部のように感じられるらしい。まがいなりにも主従の契約をした俺は京を身につけることにより俺も時間の流れを読むことが出来るようになった。

「京には会ったばかりだが色々感謝しているよ。癒紅も姉みたいな存在が出来てうれしそうだったしな。」

「博麗神社もこれでよりいっそうづるさくなりそうだわ」

嬉しそうな顔をして言っても全く説得力がないが、それを言ったら夢想封印でも打ってきそうなので言わない事にする。

「それでリュウはこれから何するの？まあこの幻想郷には暇つぶしになりそうなものはほとんどないんだけどね」

「そろそろ外から俺の知り合いが来ると思うんだ。それまではここでのんびりお茶でも飲んで待つさ」

これから何をするか聞いてきた霊夢に俺は昔を思いながらそう答えた。

「その知り合いってどんな奴なんだ？」

「ああ、それは……って魔理沙！！お前いつ来たんだ！？」

「さっききたんだぜ。そんなことより知り合いつてどんな奴だ？」

いつのまにか俺の隣でお茶を飲んでいる魔理沙がしつこく聞いてくるのでこんなことを言った。

「俺の彼女だ」

ビキー！！

「……あの霊夢さん？あなたの湯飲みにひびが入ったんですけど大丈夫ですか？」

「大丈夫よ、問題ないわ。でその彼女つてのはどんな奴なの？」

霊夢は何事も無かったかのように笑顔で聞いてくる。だが俺には見えている……その輝かしい笑顔の所々にある青筋が！！

「怖いぜ……」

「彼女なんて冗談だ！！ただの知り合いだ！！」

なぜ怒っているかわからないが確実に彼女の部分でキレているので冗談だと明かしておく。

「ふうん、そうなんだ。ならいいわ」

ふー、何とか怒りを静めれたみたいだ。これからはこんな冗談を言わないように気を付けよう。

「で実際どんな奴なんだ？」

魔理沙はどうしてもそこがきになるらしいな。減るもんでもないし教えておくか。

「外の寺子屋みたいなのこの友人とその保護者ってとこかな」

「なんだ、案外普通の奴っぽいな」

「それは来てからの楽しみだ」

久しぶりに会うので待ち遠しい気持ちを抱きながら俺たちは雑談しながらその日を過ごした。

side 早苗

やっとこの日が来ました！これでやっと流斗さんに会えます！こっちの友達と会えなくなるのは寂しいですが流斗さんと会えると思うとどうしてもつぎつぎしてしまいます。

「早苗。そろそろ行くよ」

どうやら神奈子様達の準備が終わったようですね。

「はい！今行きます！！」

待っていてくださいね流斗さん。今行きますから

side 早苗 out

第9話 ～これからのこと～（後書き）

やっと風神録編に入ります。けどその前に番外編を3つほど挟みたいと思います。内容は流斗の修行中にあっただ、

- ・紅魔館へのおつかい
- ・幽香とのエンカウント
- ・萃香とのエンカウント

以上の3つです。

戦闘物が続くのでうまくかけるかわからないですけどお楽しみ下さい。

それとアンケートの方も受け付けております。

お題は「バカとテストと召喚獣の2次創作を書くことについて」です。

選択肢は

- 1 ・新作期待！w k t k
- 2 ・東方に専念して欲しいからダメエエ！！
- 3 ・他の作品をしてくれ～

の3つです。

答えてくれたり感想をくれたりすると作者のモチベーションもあがるのでどうぞよろしくお願い致します。

番外編2話 〱紅魔館へのおつかい〱（前書き）

今回はかなり長めになってしまいました・・・

番外編2話 　く紅魔館へのおつかいく

「ちくしょく！！死んでたまるかー！！」

「待ちなさい！この侵入者！！」

「この館に侵入するとはいい度胸ですね。八つ裂きにしてあげましよう」

今、俺は緑色のチャイナ服を着た赤髪の女性とミニスカのメイド服を来た銀髪の女性に追われている。

なぜこんなことになっているかは今からすこし前のこと・・・

く少年回想中く

「え？おつかいにいけって？」

「そうよ。頼まれてくれない？」

身体強化の修行をしていると霊夢におつかいに行つて欲しいと頼まれた。

修行はもう終わる所だったので心良く引き受けることにする。

「いいぜ。でどこまで行けばいいんだ？」

「ここからあつちに飛んでいけば湖が見えるわ。その先にある紅魔館にこれをとどけてちょうだい」

そついいながら霊夢が出したのはひょうたんだった。

「了解だ。ところでこの中、何がはいつてるんだ？」

「液体に決まってるでしょ」

「いや・・・そうゆうことを聞いてるんじゃないんだが・・・まあいいや。じゃあ行ってくるよ癒紅にはすぐ帰ってくるって伝えておいてくれ」

「わかったわ。それじゃあいつてらっしゃい」

俺は霊夢から預かったひょうたんをもって空へと飛び出していった。

博麗神社からすこし飛び湖が見えたところで周りを見渡してみる。すると遠くから見ただけで真っ赤な館を発見した。

「・・・霊夢がいつてたのはあれのことなんだろうな・・・」

普通ならあんな悪趣味な建物には近づきたくないがおつかいがあるので仕方なく近づいていく。

「・・・誰だか知らないが作った奴は趣味悪いな」

紅魔館につくとでかい門が見えた。ちょうど門の前に人が居たので話しかけてみる。

「霊夢に頼まれてこれをもってきたんだが・・・」

「・・・・・・・・・・」

話しかけてみたが反応がない。不思議に思い顔を良く見てみると、

「zzzzzzzzzz・・・・・・・・・・」

鼻ちようちんを膨らませながら気持ちよさそうに眠っていた。

（門番なのに眠ってたら本末転倒だろ・・・）

門番の人が寝ていて役にたたないのでおつかいに来たことを館の人に伝えるために門を開け中に入った。

門の中はかなり広く、門から館の入り口までゆづに30m程あった。

（博麗神社とは桁がちがうな・・・霊夢の前ではこんなこといわないようにしよう・・・）

もし言ったときの事を考えたら悪寒が走ったので言わないことを肝に銘じておこつ。

「そこの方、すこしお待ち下さい」

歩いていると前方から声が聞こえてきた。声がするほうを見ているとそこにはミニスカートのメイド服を着た銀髪の女性がいた。

「この人か？」

「はい。この紅魔館でメイド長をさせて頂いている十六夜いざよひ 咲夜と申します。それで本日は当館にどんなご用件でしょうか？」

「霊夢にこれを持っていくよう頼まれて来たんだが何か聞いてないか？」

丁寧に挨拶をされたのでこちらも丁寧に返した。だが十六夜は顔をしかめた。

「そのようなことは承っておりません・・・ということであなただを侵入者として拘束致します」

「何!？」

まさか霊夢の奴、伝えてなかったのか!?

「それではあなたを侵入者として拘束致します・・・美鈴!!早く来なさい!..!」

その言葉を聞いて後ろを振り返ってみると今まで眠っていたはずの門番が何故か頭にナイフが刺さった状態で走ってきていた。

「ひどいです咲夜さん！！起こすならもつと穩便に起こしてくださいよ！！！」

「門番なのに寝ていたあなたが悪いんでしょう？それより2人がかりで侵入者を捕まえるわよ」

「了解です！！！」

「ちくしょー！！不幸だー！！！！！」

某不幸少年の口癖を叫びながら前後から迫ってくる2人から逃げるように俺は横に走っていった。

く少年回想終了く

そして今に今に至るわけである・・・っていうか回想中にボコボコにされたあげく捕まってしまう現在、縄でぐるぐる巻きにされ庭にいる。いくらなんでも2人がかりは卑怯だ・・・

「捕まえたはいいけどどうするんですか？」

「とりあえずお嬢様に食料としてお渡ししようかしら」

「俺のまえでそんな物騒な話はやめてくれ！！！」

逃げようにも縄で縛られているので逃げられない。死んだら霊夢の枕元に通ってうらみつらみを言いまくってやる・・・！！

「咲夜、その人は私が霊夢に頼んだ物を持ってきてくれた人みたいだから勘弁してあげてくれないかしら？」

俺が死んだ後の事を考えていると館の方から声が聞こえた。そつちを見てみるとピンク色の変わった服をきた小さな子供が傘をさしてこちらに歩いてきていた。

「お嬢様！そそそ、それではこの方は侵入者ではないのですか？」

見た感じ焦っている十六夜がお嬢様らしき人に確認を取っている。

「そつよ。私があなたに伝えるのを忘れていただけなの。ごめんなさい」

「侵入者じゃないんですか。ならこの縄ははずしても良さそうですね」

そついいながら門番が俺を縛っていた縄を解いてくれた。

「やっと誤解がとけたか・・・危うく食料ににされるところだった」

「勘違いをして申し訳ございませんでした！！」

十六夜が深く頭を下げてくれたのでこの件についてはもう気にしない事にしよう。それにしても十六夜は完璧なメイドみたいな感じだと思っていたのに案外ドジっ子？

「まあいいさ。じゃあこれを受け取ってくれ」

俺は預かっていたひょうたんをピンク色の服をきた子供に渡した。

「ありがとう。そう言えば自己紹介がまだだったわね。私はこの紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ」

「私はこの紅魔館の門番をしている紅 ほん 美鈴 めいりん です」

「私は先ほどさせていただいたので省きますね」

「俺は外の世界から来た流斗だ。今は博麗神社に住んでる。よろしく」

お互いに自己紹介を済ませ握手をした。そしてレミリアと握手をした時、レミリアがニヤッと怪しい笑みを浮かべていた。

「ところで流斗？お詫びついでにあなたにいい物をあげるわ」

「いいのか？もうさっきの事はきにしていんだが」

レミリアがそんなことを言ってきたが俺はもう気にしないことにしているので聞き返す。

「いいのよ、どうせこの館にあっても誰も使い手がないもの。それじゃあ咲夜あれを持ってきて」

「わかりました」

十六夜が了承の返事を出した瞬間に消え、少しびっくりしたがその数秒後にいきなり何かをもって現れた。

「流斗様、これを」

「ああ、ありがとう」

それは細長いつつみで持った瞬間に堅い感じがした。さっき使い手とかいっていたしもしかしてこれは……

「レミリアこれはもしかして槍か？」

「そうよ。昔とある理由で集めていたのだけど、その中で私の手に余る物だからあなたにあげるわ」

「そんな物を俺がもらって使いこなせるのか？」

「大丈夫よ。わたしにはその運命が見えてるから」

「運命？」

レミリアが言った運命が見えるという言葉が気になり聞き返してみる。

「私の能力は『運命を操る程度の能力』。この能力を使ってさっき握手をしたときにあなたの運命を覗かせてもらったわ」

「そういうことか。それじゃあその運命とやらを信じてこれはもらっておくよ」

俺はありがたくこの槍をもらっておく事にした。俺、結構槍好きだし。

「それじゃあ、おつかいもすんだしそろそろ帰らせてもらおうよ」

「ええ、それじゃあさようなら」

「またおこしく下さいませ」

「また今度来て下さいね」

俺はレミア達と簡単に挨拶を交わして帰路についた。帰ったらこの槍を使って戦闘の練習でもしてみるかな。

番外編2話 〈紅魔館へのおつかい〉（後書き）

やっと流斗の主力武器入手です!!

まだ使う機会はないと思うので登場はもうすこしお待ち下さい。

そしてアンケートの結果です!!

1・0票

2・3票

3・0票

ということで新作は作らずしばらくは東方一本で行きたいと思いません。

これからもがんばっていくので応援よろしくお願い致します!!

感想等はいつでも受け付けておりますので気が向いたらよろしくお願致します。

番外編3話 く屋根の上の鬼く（前書き）

最近は本当にネタが無くて困っています・・・
書きためもせずに始めた事を後悔しました・・・

番外編3話 屋根の上の鬼

今日も俺はいい感じに暖かい気温の中、修行をしている。

今は能力の修行をしているところだ。能力といっても俺はあまり頭は良くなって使い方がいまいちわからないから大抵時間操作しかないんだけどな。

まあそんなことはさておき、俺はさつきから博麗神社の屋根の上から気配を感じていた。

何故気配を感じたれたかというところ、今は能力の修行をしていることもあり、風の流れがおかしいことを感じたからである。明らかに何かを避けて風がながれている。

とりあえず話しかけてみるか。

「屋根の上に居る奴、何してるんだ？」

「!?!?へえ、私に気づくなんてやるねえ」

そんな言葉と共に姿を表したのは、ひょうたんを持って頭から角を生やした子供だった。

「私は伊吹萃香^{いぶきすいか}。私はここからあなたの様子見てたんだ。勝手にのぞき見たことは謝るよ」

「それは別に気にしてないが・・・お前の頭に生えてるのは・・・もしかして角か？」

「そうさ。私は鬼だからね」

鬼か。確かかなり強くてバトルマニアだって霊夢から聞いたな・・・
なんか嫌な予感が・・・

「で、その鬼がなんで俺の様子を見てたんだ？おもしろいもんでもないだろ」

「いや、最近博麗神社で外来人が修行してるって聞いたもんだからちよつと私が鍛えてやろうかとおもってさ」

嫌な予感の中かよ！！最悪だ・・・未だに霊夢に一発も入れられない俺が鬼となんて戦ったら大怪我なんてものじゃすまん！！

「悪いが俺はお前と修行するつもりはな」
「じゃあいくぞー！！」
「つて聞けよ！！」

つつこむ俺を無視して伊吹はすさまじい早さで俺に突進してきた。

「うお！！お前そんなスピードでつつこんでくるな！！」

何とか横に避けてかわしたが、あんなものに当たれば確実にあばらの5、6本は折れるぞ！！

「結構前から見てたけどなかなか良い動きするじゃないか。これなら4割くらいの力を出しても良さそうだね」

あれでまだ4割以下だったのか！？これで4割の力なんて出されたら・・・！！

「そら!!」

そんなことを考えていたら目の前には伊吹がいて、あごに何かの衝撃を感じたと思った瞬間、俺の意識は落ちた・・・

side 萃香

私は今屋根の上で、下の人間の修行の様子を見ている。

さつきから見ていて思うのはあの人間はかなりの力を秘めているということだ。

覚醒している力が一つとまだ覚醒していない力が一つある。それに加えて元から持っている霊力がかなりあるのと、何故かはわからないけど妖力の反応もある。

見ているかぎり、今はまだ経験が浅く、能力も使いこなせていないみたいだけど将来は確実に幻想郷でも上位クラスの實力になる。

私はこれからどんな風に成長していくのか楽しみになっていた。近い将来、戦ってみようかな。

「屋根の上に居る奴、何してるんだ?」

「!?へえ、私に気づくなんてやるねえ」

どうやら私がいることに気づかれたみたいだから屋根の上から下に

おりる。

「私は伊吹萃香^{いぶきすいか}。私はここからあなたの様子見てたんだ。勝手にのぞき見したことは謝るよ」

まずは隠れて見ていたことを謝る。いい気分のする事じゃないからねえ。

「それは別に気にしてないが・・・お前の頭に生えてるのは・・・もしかして角か？」

「そうさ。私は鬼だからね」

目の前の人間の顔から血の気が引いていく。まあ人間からしてみれば鬼を見るのは初めてなんだろう。

「で、その鬼がなんで俺の様子を見てたんだ？おもしろいもんでもないだろ」

「いや、最近博麗神社で外来人が修行してるって聞いたもんだからちよっと私が鍛えてやろうかとおもってさ」

これは見ていたときから考えていたこと。見ているだけじゃ私も暇だからね。なんだかこんな事考えてると鬼の血がうずいてきたよ！

「悪いが俺はお前と修行するつもりはな」じゃあいくぞー！！」って聞けよ！！」

なにかいったあいつの言うことを遮りながらあいつに向かってつっこんでいく。今の力ではぎりぎり避けられるか避けられないか位の

勢いで。

「うお！！お前そんなスピードでつつこんでくるな！！」

それなのにあいつは見事に避けて見せた。戦闘の才能は抜群のようだね。ホントに将来が楽しみだよ

「結構前から見てたけどなかなか良い動きするじゃないか。これなら4割くらいの力は出しても良さそうだね」

さっきは2割くらいだったからさらに力を込めてやってみる。出来ればこれも避けてほしいな。

「そら！！」

私はあいつの目の前に移動し、あいつのあごめがけてアッパーを放った。けどあいつは私の姿を追い切れていなかったみたいで、見事に当たって気を失ってしまった。さすがにこの段階はまだ早かったみたいだね。私もすこし興奮しすぎちゃったかな？

「とりあえず神社に持っていこう」

人間を背負って私は神社に向かっていった。

side 萃香 out

「んん・・・ここは？」

俺が目覚めてすぐに目に入った物は・・・

「知ってる天井だ」

見慣れた博麗神社の天井だった。さすがに知らない天井だったとい
う落ちはなかったか・・・。ていうかこんな感じ前にもなかったか？

「目が覚めたみたいだね。さっきはごめんよ」

近くには伊吹がいて、すこししょんぼりしながら謝ってきた。

「別にいいさ、死にはしなかったんだし」

「そう言ってくれど助かるよ」

「そついえば自己紹介がまだだったな。俺の名前は流斗だ、よろし
く」

「おう！よろしく流斗。私のことは萃香って呼んでくれ」

お互いに握手をしながら自己紹介を終えた。

「それとこれからはちよくちよく流斗の修行に参加するから」

「何いい!?!」

「私にあんたのことが気に入ったからね。これからもよろしく」

「不幸だーーーー!!!」

これから俺に降りかかる不幸を嘆きながら俺は力の限り叫んだ。

ちなみにこれからの修行がいつそう過酷なものになったのは言うまでもない・・・

番外編3話 〈屋根の上の鬼〉（後書き）

今回は萃香が出てきました。

それと同時に流斗にはもう一つの隠された能力が有ることが発覚しました！！

それは武器と一緒にまだ出てくる機会はないと思うのでできればwktkしながら出番をお待ち下さい。

それと今更ながら東方はキャラが多いのでまだ出ていないキャラは沢山います。そこで皆様に『このキャラだして！！』という要望があればどうぞ。出来る限り登場させます。

風神録までにまだ1話ありますので風神録編が楽しみという方はもう少しお待ち下さい。

上のキャラの事と感想は作者もwktkしながらお待ちしています。皆様の書いてくださる事が作者のやる気&パワーにつながるのですよ。ろしくお願い致します。

番外編4話 くまさかのエンカウント

今日は修行が休みなので、俺は博麗神社からでて散歩をしている。

癒紅は毎度の事ながらお昼寝中である。まあ育ち盛りだしな。妖怪にあるのかはわからないが。

ところでなぜ散歩しているかと言うと、最近適当な俺に似合わないような事ばかりしていて疲れたからだ。男としては強くなりたいたいという気持ちはあるが、やっぱりいつもそればかりしていると飽きるものだ。

それにしてもこうして散歩していると周りの自然に癒されるな。

俺が外で住んでいたところは、建物が多くて自然と呼べるものがある限りなかったから新鮮な感覚だ。視界の殆どを緑と黄色で覆われているなんて滅多にないしな。

それにしても立派なひまわりだ。こんなに沢山のひまわりをみたのは初めてだな。どれもこれも普通のひまわりとは一線を画す美しさ。……もしかしてここは。

「さあて！気分転換も終わったしそろそろ帰るかな！」

「あら、もっとゆっくりしていけばいいのに」

自然の魅力を堪能していたらいつの間にか太陽の畑まで来ていた。・
・そしてすぐ隣には幻想郷最凶（誤字にあらず）である風見幽香。

・・・なんか俺、運悪くない？勝手に能力発動して運の流れが遮断されてるんじゃないだろうな？

「いえ！もう充分気分転換できたので結構です！」

いつの間にか隣にいるUSC（U：アルティメット S：サデイス ティック C：クリチャー）から全速力で離れる！

「いきなり走って逃げるなんて失礼じゃない？」

「さっきまで後ろにいたのになんで俺の前にいるんだよ！？」

でたらめだ！！やばいやばいやばい！！このままだと今までの経験則だと！！

「私はただあなたの実力が知りたいだけなんだけど？」

やっぱりか！？

「断固拒否する！！俺はまだ死にたくはない！！」

「大丈夫よ。力は押さえるから」

「信用できるか！！俺は逃げる！！」

「私が逃がすとも思っているの？せつかく齒ごたえのありそうな人間が来たのに」

微笑を浮かべながら持っていた傘を逃げている俺に向けてくる風見。

主に耐久力の面でね。

side 幽香 out

俺が意識を取り戻して最初に見たモノは・・・

「知らない天井だ・・・」

今回は本当に知らない天井だった。ここはどこだ？

「あら、起きたのね？」

この声は風見！？ということとはここは風見の家か！？

俺は体をこわばらせてすぐに逃げられる準備をする。

「そんなに身構えなくても何もしないわ」

穏やかな声でそういう風見。

「・・・本当か？」

「本当よ」

全く攻撃性のない声から本当だと信じ落ち着く事にする。

「それにしても私のマスターパークを食らってもそれだけで済むなんてやるわね」

「まあだてに鍛えてたわけじゃないからな」

今までの修行は無駄じゃなかったようだ。

「これからもがんばって修行してね？（私を楽しませるために）」

「ああ……ありがとう……」

普通なら暖かい言葉のはずなのに俺は寒気を感じた……

「それでまだ自己紹介してもらってないんだけど」

「そうだったな。俺は流斗、博麗神社に住んでいる外来人だ」

「あなたは知っていたみたいだけど、私は風見かざみ幽香ゆうかよ。よろしく

「……ほどほどによろしく」

握手は怖かったが初対面なので礼儀としてはやらなければならなかったのでやっておいた。

「あなたはいつまで修行するつもりなの？」

「とりあえず後、半年ぐらいだな。でもなんでそんなこと聞くんだ？」

「話題がなかったから聞いただけよ、気にしないで。とりあえずその傷が治るまでゆっくりしていいって」

「じゃあお言葉に甘えさせてもらおうよ」

優しい笑顔でそう言ってきたのでゆっくりすることにした。

幽香は戦闘にかかわらないかぎり結構優しいと気づいた瞬間だった。

番外編4話 くまさかのエンカウトく（後書き）

今回は幽香との出会いです。

作者の中のイメージでは、幽香は強い奴には戦闘時以外は優しいお姉さんみたいなイメージがあったので最後はやさしい感じに書いてみました。

幽香はこんなのじゃない！みたいな方はすみません。

感想、キャラのこと、誤字脱字、等いつでも受け付けておりますのでお気軽にお言いたさい。

一時更新停止のお知らせ

どうも、作者のぜんそく持ちです。

今回は一時、更新を停止させて頂くことをお知らせします。

実は作者は、耳が悪く手術をしなければならなくなりました。ですがあまりひどい状況に至ってはいない為わりと早く退院出来るそうです。

上記の事より更新を2〜3週間ほど休ませて頂きます。

楽しみにしてくださった方々申し訳ありません。

ですが入院している間に小説は書こうと思っっているので、それまではお待ち頂けると嬉しいです。

色々と迷惑をかけてしまう作者ですが、今後とも『適当な現代人が幻想入り』をよろしくお願い致します。

復活のお知らせ

どうも。作者のぜんそく持ちです。

この度、やっと退院出来ました！！

病院ではすることもなく、日々の回診にびくびくしながら過ごして
おりとても不安でした・・・

ですがそんな恐怖の入院からもようやく解放された今、小説を書
き始めていきたいと思えます！

ですがさつきも申しました通り入院中は日々の回診で「今日は何さ
れるのかな？」「痛いのかな？」などの事を考えてしまい、とても
小説のネタを考えるような精神状況ではなかったので小説の続きを
ほとんど書くことが出来ませんでした・・・

楽しみにしていた方々に申し訳ないと思えます。

以上の事で更新が遅いままではありますが、更新を再開させて頂きま
すのでよろしく願います。

それと入院中に心配してくださった方々。ありがとうございます。

これからもがんばっていくので、色々と未熟な作者をよろしく願
い致します。

第1話 く妖怪の山にきた3人く（前書き）

復活してから長い時間があいてしまってますみません。
しかも短いです。

久しぶりなので文の構成もひどいことになっているかもしれない。

「暇がつぶせるからせひ出てきてほしいな」

ありそうな、なさそうな、微妙な話をしながら霊夢とお茶を飲んで
いると、目の前の視界に黒い豆粒のようなものが見えてきた。

それはどんどん大きくなって人の形になり神社の境内に降り立った。

「ほんとに来ちゃったよ」

「?なんのことだ?」

「いやこつちの話だ」

境内に降り立ったのはもちろん魔理沙。こんなタイミングで来るな
んて予言師かなにかじゃないだろうな……。

「それで今日は何の用で来たの?」

「今日はすごい情報持ってきたんだぜ」

魔理沙はまるで新しいおもちゃを見つけたような笑顔でそう言った。

「最近、妖怪の山に外の世界からきた3人組が住み着いてるみたい
だ。その3人組が神社の神様とその巫女みたいだぜ?」

「神社だつて?」

神社と神様という単語に反応する俺。もしかしたら……

「なにか気になることでもあるの、リュウ?」

反応したことが気になるのかそう聞いてくる霊夢。

「もしかしたら俺が前に話していた人たちかもしれない」

その言葉を聞くと霊夢は黒いオーラを出した。

「へへ、面白そうな話ね？これは会いに行かないとね」

「そうか！！いつてらっさ」「リュウも行くわよね？」「・・・はい」

あんな状態の霊夢に逆らったら何されるかわかったもんじゃない。

「私は遠慮しておくぜ！！リュウ、頑張ってくれ！！」

「魔理沙！お前、裏切ったな！？」

魔理沙が来ないことを知ると、霊夢は問答無用で俺の襟を掴み飛んでいく。

俺はひさしぶりに東風谷たちに会えるという嬉しい気持ちと、黒いオーラを出している霊夢に対する恐怖を感じながら目的の神社へと向かっていった。

第2話 く道中の焼き芋く（前書き）

今回は会話多めだと思います。
相変わらず内容が薄い・・・

第2話 道中の焼き芋

霊夢に俺の襟を持って移動することをなんとかやめてもらい、今は二人並んで移動している。

霊夢の黒いオーラも落ち着いてきて今はのんびり妖怪の山の上にある神社を目指している。

ちょうど眼下には秋の色に染まった森が広がっていた。

「森がきれいだな。そう思わないか霊夢？」

「確かにきれいだとは思うけど、これでお腹がふくれる訳でもないし、お賽銭がたまるわけでもないじゃない。私が好きなのは食欲の秋よ」

「そんな身もふたもないこと言うなよ」

「まあいいじゃない。ていうかあんたも男ならもつと褒めるべきものがあるんじゃないの？」

すこし顔を赤く染めて霊夢が言う。

「男が褒めるもの？そんなもんあるのか？」

「はあ、もういいわ。どうせわからないと思ってたし」

ため息をつきながらあきれた顔で霊夢はそういった。

心の中で考えつつゆっくりと飛んでいると俺はなにかいい匂いがしてきたことに気がついた。

「なあ霊夢？なにかいいにおいがしないか？」

「そうね、このにおいは・・・芋？」

においだけで何かを当てるなんて霊夢の嗅覚は犬並みか？

「ちょっと試ってみようぜ。腹も減ったし」

「そうね。行ってみましょう」

俺たちはいいにおいのする方へ降りて行った。

↓青年・少女降下中↓

降り立ったところには焚火を見て楽しそうにしている二人の金髪の少女がいた。一人は頭にもみじを付けており、もう一人はぶどうのついたもみじ色の帽子をかぶっていた。

「楽しみね」

「そうね」

「いいにおいの正体はこれか」

「おいしそうなおいがするわね」

「え！？誰あなたたち！？」

頭にもみじを付けた方の女の子が俺たちにきずいた。さりげなく近づいていて焚火にあたっていた俺たちに気づかないほど楽しみにしていたみたいだな。

「俺は流斗。博霊神社に住んでいる外来人だ。でこっちがその博霊神社の巫女の霊夢だ」

「そんなことどうでもいいからはやくこの焼き芋をよこしなさい」

「ちょー！あつていきなりそれかよ！失礼にも程があるだろー！！つてかどんだけ腹が減ってたんだ！？」

「うるさいわねえ。こういうものは我慢しててもしょうがないのよ」

「いきなりねえ・・・まあいいわ。とりあえず自己紹介しておくわね。私が姉の秋あき 静葉しずは。こっちが妹の秋あき 穰子みのりこよ」

「姉共々よろしく願います。それと焼き芋どうぞ」

姉が元気よく自己紹介したあと妹が俺と霊夢に焼き芋を手渡してくれる。見た感じ姉は元気で妹はおっとりしてる感じだな。

「ありがとう。いきなりですまないな」

「いえいえ、秋の味覚は大勢で食べた方がおいしくなりますから」

「モグモグ・・・なかなかおいしいわね」

渡されてさっそく食べ始める霊夢。本当に遠慮がないな。

「あなたたちはなんでこんなところにいるの？」

姉の方が疑問に思ったのか聞いてくる。

「妖怪の山に最近新しく人が来たっていうからこれから会いに行こうと思っとな」

「そんな方たちがいるんですか？知りませんでした」

まあここはまだ妖怪の山のふもとだししらなくても無理はないか。

「モグモグ・・・ふう。焼き芋も食べ終えたしそろそろ行くわよりユウ」

「ああ、わかった。二人とも焼き芋ありがとうな」

「ありがとうすごくおいしかったわ」

「いいのよ。どうせ二人じゃ食べきれなかったし」

「お粗末さまでした」

「それじゃあいくよ。また今度な」

「「いつてらっしやーい」」

空に飛びあがって妖怪の山に向かっていく俺たちを二人は手を振っ

て送ってくれた。

第2話 道中の焼き芋（後書き）

最近頭に全然文が浮かんできません。
やっぱり小説かくのって難しいな。

感想、意見、出してほしいキャラなどなんでも受け付けております。

第3話 く森の少女と黒い影く（前書き）

遅い投稿になってすいません・・・

今年は今回の投稿とあと1回は投稿したいと思うので楽しみにしていただければ幸いです。

第3話 く森の少女と黒い影く

俺達は秋姉妹に会ったあと妖怪の山に向かって進んでいた。

霊夢も焼き芋を食べて心なしか機嫌が良くなったし神社に着く時までは安全そうだ。

だがその霊夢もこの暗い森に入ってから機嫌がよかった霊夢も顔を歪めていた。

「それにしてもさっきから暗くない？」

霊夢はこんなことに動じるような性格じゃないと思っていたんだが、どうやらそこは女の子。やはりすこしこたえていたらしい。

「それにさっきから体が重くなってきて気分も悪くなってきたわ・
」

体が重くなってきた？どういうことだ？気分はわからなくもないが、体が重くなるってことはないはずだ。

「大丈夫か？少し休憩でもするか？」

「遠慮しとくわ。それよりもこんなところから早く出たいから先に進みましょう」

そう言って先に進もうとした霊夢。

だが先に進もうとした先にはひとりの女の子が立っていた。

「あなたたち、こんな所になにをしにきたの？」

「俺達はこの先の妖怪の山に最近やってきた3人組に会いに来たんだが」

「私は詳しく知らないけどここから先は危ないわ。引き返す気はない？」

その女の子はできるだけ穏便に済ませたいようで丁寧に聞いてきた。

「残念だけどそれはできないわ」

霊夢はその言語を速攻で否定し、先に進んでいった。

「あゝあ、行っちゃったよ・・・まあ先を急がなきゃいけないから俺も行くよ。君の名前を聞いてもいいかな？」

俺は初対面のその子に名前を尋ねた。

「私は鍵山かぎやま雛ひな。人間達の厄を払っている厄神よ」

「そうか・・・俺は流斗。博麗神社に住んでいる外来人だ。よろしく」

俺は握手しようとして手を出したが、雛は手を握り返そうとしなかった。

「ごめんなさい・・・握手しないのは失礼だけど、私に近寄ると人間は不幸になってしまうから」

そう言っつて雛は、悲しそうに虚空を見つめていた。

俺はなんだかその姿を見て悲しい気持ちになり、できるか分からないがあることをやってみた。

「その理由はもしかして雛の周りに集まっている黒い煙のことかな？」

「！？そうだけど、なぜあなたには見えるの？」

「まあそれは俺の能力のおかげかな」

俺は能力を使っつて雛の周りの流れを読み、厄の存在を視た。

「それでこの煙は本来どうするモノなんだ？」

「私が集めたあと他の神に渡して浄化するの」

「そうか・・・じゃあこれはいらぬものなんだな？」

「もしかしてあなた！？」

俺は能力を使っつて厄の流れを完全に消滅させた。

「よし、これで握手できるな」

そついい俺は雛に向かつて手を出した。

「なんでこんなことの為にあんなことを・・・」

「だってこんなに近くににいるのに握手できないなんて嫌だろ？」

「全く、おかしな人ね」

そう言っつて少し呆れながらも雛は俺と握手をしてくれた。

「おっと！霊夢とかなり差をつけられちゃった！！じゃあ俺は行くから！機会が会ったらまた会おう」

「ええ、また会いましょう流斗」

そう言っつて今頃、俺が付いてきていないこと知り、静かに怒っているだろう霊夢に追いつくために全速力で飛んでいった俺だった。

そこにまだ消滅しきっていない厄があるとも知らずに・・・

side 雛

全くあの人間はおかしな人ね。

会っつて間もない人と握手をするためだけにあんなことをするなんて。

・・・温かい手だったわね。

また会えるのが楽しみだわ、流斗。

「自分の手を見つめて赤くなるなんてお前、変態さんか？」

「誰!？」

そこには幻想郷では見たことも内容な服を着た男が立っていた。

「そんなもん教えるわきゃあねえだろ?まして・・・」

言葉の途中で目の前にいた男が消えたと思うとその男は私の目の前にいた。

そしてその口からこんな言葉が聞こえたあと私は意識を失った。

”これから俺に食われる奴にな”と

第3話 く森の少女と黒い影く（後書き）

どうだったでしょうか？

今回も久しぶりの投稿なので文などがおかしくなっているかもしれません。

感想・意見等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3673n/>

適当な現代人が幻想入り

2010年12月30日16時01分発行